

地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書

——下古志地区一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年1月

出雲市教育委員会

地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書

— 下古志地区一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1994年1月

出雲市教育委員会

序

出雲市には、多種多様な多くの遺跡がありますが、今回発掘調査を行いました横穴墓は出雲市内に現在確認されているだけでも300基近く存在しており、出雲の古墳時代後期を特徴づける遺跡です。しかしながら、その詳細については、未だ解明されておらず、まだ、この地域での横穴墓の研究は始まったばかりといえるでしょう。

横穴墓は、大念寺古墳や上塙治築山古墳などの巨大な横穴式石室を持つ古墳と同時期に築かれており、当時の社会構造を復元する上で欠かすことのできない重要な遺跡であります。

本書が、今後の研究の一助をなし、広く市民の方に文化財の保護についてご理解いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・報告書の作成にあたっては、地元の方々、関係機関に多くのご指導とご援助をたまわりましたことを、厚くお礼申し上げるとともに、今後とも出雲市文化財行政の推進にご協力いただきますようお願い申し上げます。

平成6年（1994）1月

出雲市教育委員会

教育長 鐘 築 芳 信

例　　言

1、 本書は、出雲農林事務所の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成3・4年度に実施した下古志地区一般農道整備事業に伴う地蔵堂横穴墓群の発掘調査報告書である。

2、 発掘地は、次の通りである。

　地蔵堂横穴墓第2支群　出雲市下古志町字奥分1846-7

3、 調査組織は次の通りである。

　調査主体　出雲市教育委員会

　事務局　下垣晴司（文化・スポーツ課長）

　調査員　松山智弘（文化・スポーツ課主事）、米田美江子（同臨時職員）

　調査指導　〔平成3年度〕

　丹羽野裕（島根県教育委員会文化課）、井上晃孝（鳥取大学医学部教授）

　〔平成4年度〕

　角田徳幸（島根県教育委員会文化課）

　遺物整理　矢田愛子、河井栄子

4、 遺跡の名称は、今後も新たに横穴墓が発見されることが予想されるため、これまで地蔵堂横穴墓として確認されている10基の横穴墓を地蔵堂横穴墓第1支群、今回調査を行った3基の横穴は、地蔵堂北横穴墓群と呼称していたが、地蔵堂横穴墓第2支群とする。

5、 報告書作成にあたって、人骨鑑定については、鳥取大学医学部　井上晃孝教授に、須恵器胎土分析については、奈良教育大学　三辻利一教授の各氏に依頼し、玉稿を賜った。また、地蔵堂4号横穴については、黒田貴保（島根県教育委員会文化課）・西尾克己（同）の両氏より原図の提供を受けた。記して感謝いたします。

6、 本書で使用した方位は磁北をしめす。

7、 遺物の実測・浄写ならびに遺構の浄写は松山・米田が行い、遺物撮影は松山が行った。また、文章は松山が執筆した。

8、 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会で保管している。

9、 調査・報告書の作成に当り下記の方々にご協力頂いた。記して感謝申し上げます。

　池田満雄（出雲市文化財審議委員）、平野芳英（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館）、原田敏照（島根県教育委員会文化課）、広江耕二（同）、守岡正司（同）、大谷晃二（島根県立浜田高校）、久米　基（島根大学学生）、増野哲治（同）、水口晶郎（同）、矢野　司（同）、神門公民館、神門川小学校

目 次

第1章 調査の経過と遺跡の概要	1
1、調査に至る経緯	1
2、調査の経過	1
3、遺跡の概要	1
第2章 位置と環境	3
第3章 遺構と遺物	7
1、地蔵堂横穴墓第2支群	7
(1) 1号横穴墓	7
(2) 2号横穴墓	11
(3) 3号横穴墓	25
2、地蔵堂横穴墓第1支群	27
(1) 4号横穴墓	27
(2) 6号横穴墓	29
(3) 地蔵堂横穴墓第1支群出土遺物	30
第4章 自然科学分析	35
第5章 関連遺跡	41
1、井上横穴墓群	41
2、神戸川小学校所蔵遺物	41
(1) A支群 1号横穴墓出土遺物	41
(2) A支群 2号横穴墓出土遺物	42
(3) 神戸川小学校所蔵出土地不明遺物	43
第6章 まとめ	45

図版目次

図1 調査区位置図	2	図17 第2支群2号横穴墓出土遺物(2)	25
図2 遺跡の位置と周辺遺跡	5~6	図18 第2支群2号横穴墓出土遺物(3)	25
図3 第2支群1号横穴墓遺物出土状況	8	図19 第2支群3号横穴墓実測図	26
図4 第2支群1号横穴墓実測図	9~10	図20 第1支群横穴墓配置図	27
図5 第2支群1号横穴墓pit2土層図	11	図21 第1支群4号横穴墓実測図	28
図6 第2支群1号横穴墓加工痕①(拓影)	12	図22 第1支群6号横穴墓実測図	29
図7 第2支群1号横穴墓加工痕②(拓影)	12	図23 第1支群出土遺物(1)	30
図8 第2支群1号横穴墓出土遺物(1)	14	図24 第1支群出土遺物(2)	31
図9 第2支群1号横穴墓出土遺物(2)	15	図25 第1支群出土遺物(3)	32
図10 第2支群2号横穴墓pit1土層図	16	図26 第1支群出土遺物(4)	33
図11 第2支群2号横穴墓pit2土層図	16	図27 第1支群出土遺物(5)	34
図12 第2支群2号横穴墓土層図・ 遺物出土状況	17~18	図28 出雲市地蔵堂横穴墓第2支群2号横穴墓 出土須恵器のRb-Sr分布図	35
図13 第2支群2号横穴墓実測図	19~20	図29 井上横穴墓群A-1号横穴墓出土遺物	42
図14 第2支群2号横穴墓加工痕④(拓影)	21~22	図30 井上横穴墓群A-2号横穴墓出土遺物	43
図15 第2支群2号横穴墓加工痕⑤(拓影)	23	図35 神戸川小学校所蔵遺物	44
図16 第2支群2号横穴墓出土遺物(1)	24		

文中写真目次

写真1 第2支群1号横穴墓加工痕③(左側壁)	13	写真5 第2支群2号横穴墓加工痕③	21~22
写真2 第2支群1号横穴墓加工痕④(天井頂部)	13	写真6 第2支群1号横穴墓出土人骨(1)	39
写真3 第2支群2号横穴墓加工痕①	21~22	写真7 第2支群1号横穴墓出土人骨(2)	40
写真4 第2支群2号横穴墓加工痕②	21~22		

巻末写真図版目

図版1-1 地蔵堂横穴墓第2支群遠景	図版3-1 第2支群1号横穴墓完掘状況(墓道)
図版1-2 第2支群1号横穴墓遺物出土状況	図版3-2 第2支群2号横穴墓検出状況
図版1-3 第2支群1号横穴墓床	図版3-3 第2支群2号横穴墓道部 sondage出土状況
図版2-1 第2支群1号横穴墓人骨出土状況	図版4-1 第2支群2号横穴墓須恵器床検出状況
図版2-2 第2支群1号横穴墓pit2検出状況	図版4-2 第2支群2号横穴墓遺物出土状況
図版2-3 第2支群1号横穴墓pit2完掘状況	図版4-3 第2支群2号横穴墓遺物出土状況(右袖)
図版2-4 第2支群1号横穴墓完掘状況(玄室)	図版5-1 第2支群2号横穴墓pit1半堀状況

- 图版5—2 第2支群2号横穴墓pit1发掘状况
图版5—3 第2支群2号横穴墓pit1完掘状况
图版5—4 第2支群2号横穴墓pit2半裁状况
图版5—5 第2支群2号横穴墓墓道完掘状况
图版6—1 第2支群2号横穴墓玄室完掘状况(1)
图版6—2 第2支群2号横穴墓玄室完掘状况(2)
图版6—3 第2支群2号横穴墓奥壁加工状况
图版7—1 第2支群3号横穴墓完掘状况
图版7—2 第2支群3号横穴墓土层堆积状况
图版7—3 第2支群1号横穴墓出土遗物(1)
图版8—1 第2支群1号横穴墓出土遗物(2)
图版8—2 第2支群2号横穴墓出土遗物(1)
图版9—1 第2支群2号横穴墓出土遗物(2)
图版9—2 第2支群2号横穴墓出土遗物(3)
图版10—1 地藏堂横穴墓第1支群远景(1993年)
图版10—2 地藏堂横穴墓第1支群远景(1971年)
图版11—1 第1支群1号横穴墓
图版11—2 第1支群2号横穴墓
图版11—3 第1支群6号横穴墓
图版12—1 第1支群4号横穴墓
图版12—2 第1支群4号横穴墓(石床)
图版13—1 地藏堂横穴墓第1支群出土遗物(1)
图版13—2 地藏堂横穴墓第1支群出土遗物(2)
图版14—1 地藏堂横穴墓第1支群出土遗物(3)
图版15—1 地藏堂横穴墓第1支群出土遗物(4)
图版16—1 地藏堂横穴墓第1支群出土遗物(5)
图版17—1 井上横穴墓群A—1号横穴墓出土遗物
图版17—2 井上横穴墓群A—2号横穴墓出土遗物(1)
图版18—1 井上横穴墓群A—2号横穴墓出土遗物(2)
图版18—2 神戸川小学校所藏出土土地不明遗物

第1章 調査の経過と遺跡の概要

1、調査に至る経緯

平成3年12月に出雲農林事務所による県営一般農道整備事業において、工事中に占墳が発見されたとの連絡があり、現地を見たところ横穴墓が1基開口しており、遺物・人骨が残っていることも確認した。また、すぐ南では、地蔵堂横穴墓群として10基の横穴墓が知られており、今回発見された地点においても複数の横穴墓が存在することが予想されたが、遺物・人骨の依存状態もよく、横穴墓も完全に開口していたことから、とりあえず発見された1基を調査した後付近の試掘調査を行うこととした。

試掘調査は、丘陵斜面の上部から、重機で徐々に表土を剥いでいった。その結果、1号横穴墓とほぼ同じ高さから、さらに2基の横穴墓が発見された。これらの横穴墓は、丘陵の上部に開口しているため、これより下部の表土を剥ぐと調査のスペースが失われることから、試掘を一次中断して協議を行った。協議の結果、平成3年度は、調査期間が取れないことから、新たに発見された横穴墓については、平成4年度おこなうこととし、丘陵下部の試掘調査についても調査後実施することとした。

2、調査の経過

1号横穴墓については、発見後直ちに必要な措置をとり12月16日から26日にかけて発掘調査を実施した。すでに漢道から前庭部の大半は工事で破壊されており床面を残すのみであった。玄室は、流入土もほとんど無く盃形等の形跡はなかった。遺物・人骨等の実測を終了した後、人骨については、鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝先生に取り上げて鑑定を依頼した。その後遺構の実測を行い1号横穴墓の調査を終了した。

2号横穴墓・3号横穴墓については、平成4年5月11日から調査を開始し6月12日に終了した。その後、丘陵の下部と、地蔵堂横穴墓第1支群の南側の丘陵についても試掘調査をあわせて行ったが、横穴墓等の遺構は検出されなかつた。

3、遺跡の概要

地蔵堂横穴墓群は、神戸川西岸の南側の丘陵の小さな谷の奥に築かれている。谷の東側の丘陵先端には妙蓮寺山古墳が、また、谷の入り口より400m北には宝塚古墳が存在している。なお、遺跡の呼称として、これまでに知られていたものを第1支群、今回発見された3基を第2支群とした。

第1支群は、現在は独立した小丘だが、本来は第2支群のある丘陵や南側の丘陵ともつながっていたものと思われる。つまり第1支群と第2支群は、同丘陵の尾根を挟んで反対側の斜面にそれぞれ位置することになる。

第1支群は、もともと2基の横穴墓が開口しており、さらに昭和10年の果樹園の開墾中に8基の横穴墓が発見され、これまで10基の横穴墓が確認されている。しかし、現在開口しているのは5基で、残りは埋没している。この支群は、標高17m～18mに位置し、開口方向は南向きである。

当時の様子を聞き取り調査した、池田満雄は、「1穴にはほぼ完全な状態で人骨が依存し、ほとんどの穴から須恵器蓋坏が出土したようである。漢道部を小石を積んで閉塞したものもあった」と報告している。また、「4号横穴はほぼ南に向かって開口しているが、石床2個を穴の主軸方向に並べておいている。」とし、石床の一つが舟形を呈することを指摘している。また、5号穴にも石床があったことを報告している。(『出雲市文化財一出雲市文化財調査報告第二集』1960年)

第2支群は、標高18mから20mに位置しており、第1支群とほぼ同じ高さに位置していることが分かる。

図1 調査区位置図



第2章 位置と環境

地蔵堂横穴墓群は、出雲平野の南、神戸川の左岸に位置する。遺跡の位置するところは、「出雲国風土記」によると神門郡古志郷にあたり、平野に入り込んでいた神門水海、そこに西から神戸川が流れ込み、南は山丘地帯である。入海・川・丘陵に囲まれた平野のなかに遺跡が密集している。ここでは、古志・神門・神西地区を神戸川西岸地区として遺跡の概要を述べる。

神戸川西岸地区は、島根大学田中義昭を中心とする出雲集落研究会による調査で3列の自然堤防が確認されている。神門水海の縮小に伴って、南から北に自然堤防が形成され、そこに集落が形成されていく。

この地域では、まず南の第一列の自然堤防に、弥生時代中期から集落が築かれるようになり、古志本郷遺跡・田畠遺跡・知井宮多門院遺跡などがほぼ同時に出現する。知井宮多門院遺跡は、自然堤防の西端に当り貝塚が検出されていることから、この遺跡が神門水海の河口付近に立地していたことがわかる。

このように、この地域での遺跡の出現は、矢野遺跡のある平野中央部や、原山遺跡のある北山南麓などと比較するとかなり遅れて出現することになる。また、出雲平野において、弥生時代中期は、集落が増加する時期でもある。

また、古志本郷遺跡・田畠遺跡・知井宮多門院遺跡では弥生時代中期から古墳時代初頭の遺物が中心で、これ以降の遺物については僅かであるが、集落は継続して営まれたか、第二列目の自然堤防に新たに形成されたと考えられる。また、古墳時代終末までには、真幸が丘丘陵（神門横穴墓群）の西端までの各所で集落が営まれたと思われる。

これらを背景に神西湖西岸の山地古墳・北光寺古墳が丘陵に築かれる。山地古墳は、径24m・高さ4mの円墳で、表面には葺石が残っている。第一主体部からは、二神二獣鏡、筒型銅器、管玉が、第二主体部からは珠文鏡と筒型銅器が出土している。北光寺古墳は、全長65mの前方後円墳で、前方部に竪穴式石室が築かれており、石棺の一部と思われる石材も採取されている。これらの古墳は共に前期に相当する。中期のこの地域の首長墓は、明確にされていないが、天神原古墳・丁之内古墳・浅柄古墳・間谷古墳群・雲部古墳群などの小規模墳が知られている。

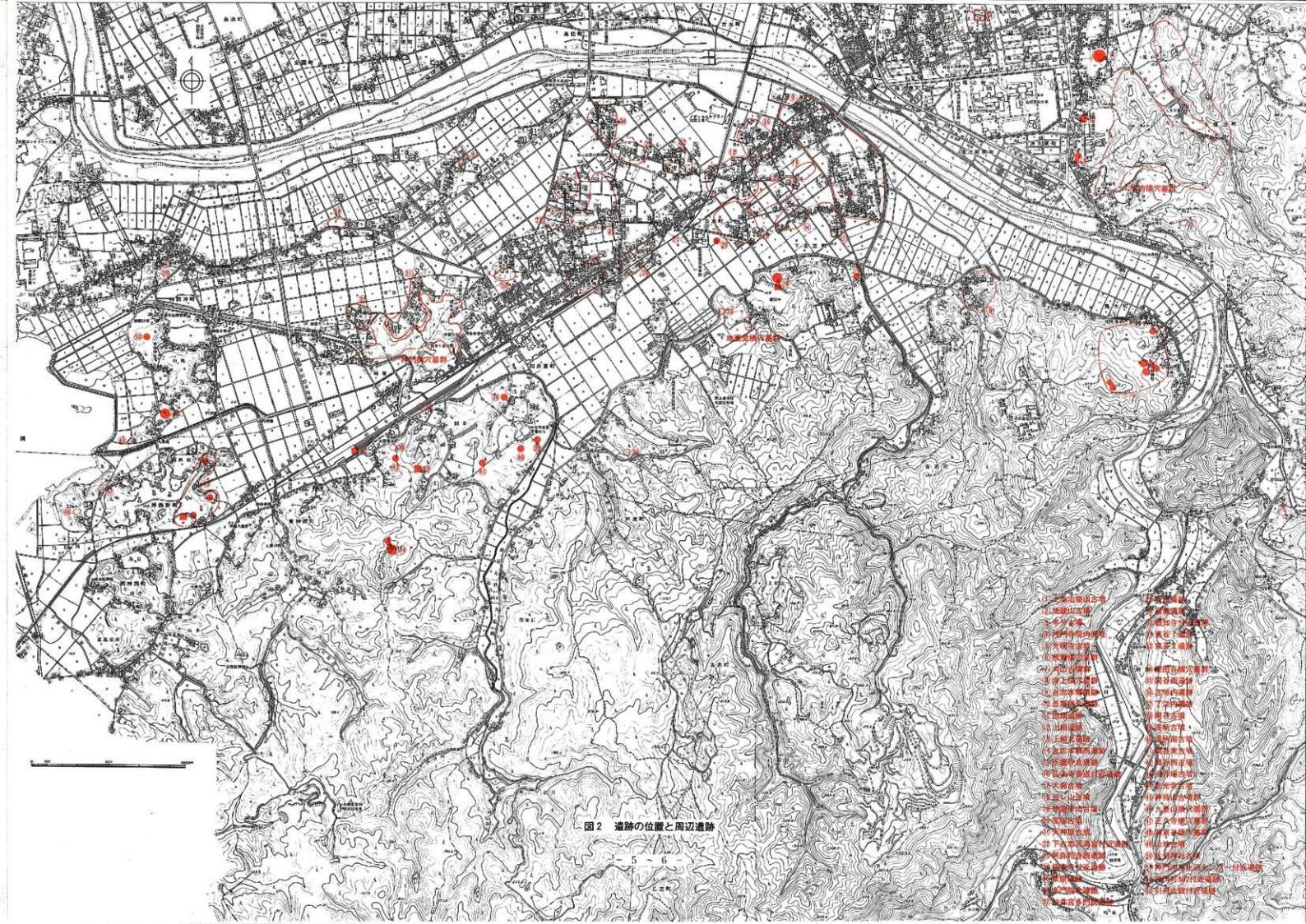
後期になると、神戸川右岸では、大念寺古墳・上塩治集山古墳・地蔵山古墳と横穴式石室を持つ首長墓が継続して築造される。これに対応してこの地域でも、妙蓮寺山古墳・放レ山古墳・宝塚古墳が造られる。さらに、神戸川の平野への入り口では42基（内前方後円墳3基を含む）からなる刈山古墳群が築かれる。また、横穴式石室の導入にやや遅れて、横穴墓も築かれるようになる。神戸川右岸では、上塩治横穴墓群、左岸では、神門横穴墓群が二大横穴墓群として形成され、それぞれ100基以上が確認されている。また、この他にも北山に矢尾横穴墓群、古前背後横穴墓、斐伊川左岸には、権現山横穴墓群、西谷横穴墓、久微園横穴墓など、出雲平野の各所で横穴墓群が形成される。

神戸川西岸地区では、神門横穴墓群以外にも地蔵堂横穴墓群、井上横穴墓群、深田谷横穴墓群、また、神西湖東岸の丘陵にも湖東屋横穴墓群、神待山横穴墓群、九景横穴墓群、正久寺横穴墓群など多くの横穴墓が築かれている。

参考文献

島根県教育委員会他「出雲・上塩治地区を中心とする埋蔵文化財調査報告」1980年

- 出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡Ⅰ」(『古代の出雲を考える』3) 1983年
- 池田満雄「考古資料」(『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第一集』出雲市教育委員会) 1956年
- 池田満雄「史跡」(『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第一集』出雲市教育委員会) 1956年
- 池田満雄「考古資料」(『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第二集』出雲市教育委員会) 1960年
- 池田満雄「史跡」(『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第二集』出雲市教育委員会) 1960年
- 田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」(『山陰地域研究第4号』鳥根大学山陰地域研究総合センター) 1988年
- 西尾克己・川上 稔「出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(出雲市教育委員会) 1981年
- 西尾克己・大國晴雄「出雲平野の古墳」(『出雲市民文庫』9 出雲市教育委員会) 1991年
- 西尾克己・原田敏照・守岡正司「出雲西部における横穴墓の様相」(『湖陵町誌研究』第1号) 1992年
- 川上 稔「山地古墳発掘調査報告書」(出雲市教育委員会) 1986年
- 川上 稔「古志地区遺跡分布調査報告書」(出雲市教育委員会) 1988年
- 川上 稔「神門地区遺跡詳細分布調査報告書」(出雲市教育委員会) 1989年
- 山本 清「古墳」(『出雲市誌』) 1951年



第3章 遺構と遺物

1、地蔵堂横穴墓第2支群

(1) 1号横穴墓

この横穴墓は、工事中発見のため前庭部については大半が失われており、羨道についても床面しか残っていない。また、玄門部についても大半が失われている。玄室内には、ほとんど流入土はなかった。

玄室(図4)

玄室は、縱長方形プランを呈するが、袖の部分は明確でなく、側壁から徐々に幅が狭まりそのまま羨道に移行する徳利状の形態をしている。開口方向はS~62°~Eである。玄室の規模は、奥壁での幅が1.14m、長さ2m、高さ1mを測る。天井はアーチ形を呈する。奥壁はやや膨らんだ三角形を呈し、ほぼ垂直に立ち上がっており側壁との界線も明瞭である。床面には、各壁に沿って幅6~20cm、深さ5~7cmの溝がめぐっており、玄門部で合流し羨道・墓道の中央を溝がぬけていく。

また、床面中央部と右側壁にPitが設けられており、前者をPit1、後者をPit2とする。Pit1は、径37cm・深さ15cmを測りほぼ正円形のプランで断面は円錐形を呈する。底には若干の炭化物が見られた。用途等は不明であり、埋葬は、完全に埋め戻してから行っている。Pit2は、右側壁の玄門寄りにトンネル状に掘られている。口の部分は径35cm~21cmを測る橢円形である。奥には17cm掘りこんどおり下面は平らである。下面是焼けて赤くなっている、奥壁沿いには炭化物を含む黒色土が堆積していることから、このPitで火を使用したものと思われる。このPitも埋葬時には完全に埋められている。

また、床面には全面に礫が敷かれている。

墓道・羨道・羨道

羨門は、床面しか残っていないが、幅92cmを測り、溝の両側に幅28cm、長さ14cm、深さ2~10cmの方形の掘りこみがあり、閉塞板をはめ込むためのものと思われる。羨道は、幅52cm、長さ55cmを測る。

墓道は、大半が失われているが、現存長は中央の溝で80cmであるが、築造時はもう少し長かったものと思われる。

加工痕(図6・図7・写真1・写真2)

この横穴墓の天井から側壁にかけての加工は、床面より60cm上を境に大きく2つに区分される。ここでは、上の部分【天井頂部~床面より60cmのところ】を天井部、下の部分【床面~床面より60cmのところ】を側壁部分と呼ぶ。

天井部の加工は、頂部より側壁方向に削り下ろすように加工する、また、頂部については奥壁に向かって加工していく。

図6は、天井部のものである。拓本の右半分は、幅5cm以上の先端の丸い工具痕(以後は円刃と呼ぶ)で、7cmピッチで上から下に削り下ろすように加工している。叩くように削ったのか工具先端の刃跡がよく残っている。この加工は、床面から約60cm上までのところで止まっているが、軒を作り出そうとしたものではないようである。図6の左側は、幅1.5cmの擦痕が残っている、これは円刃の加工痕を消すための加工と考えられ深く

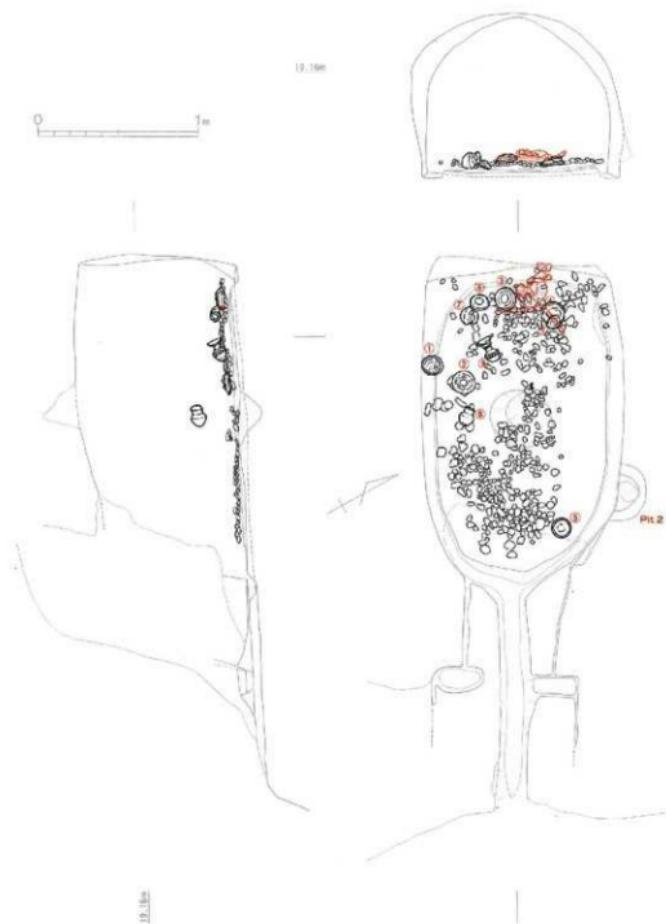


图3 第2支群1号横穴墓 遗物出土状况

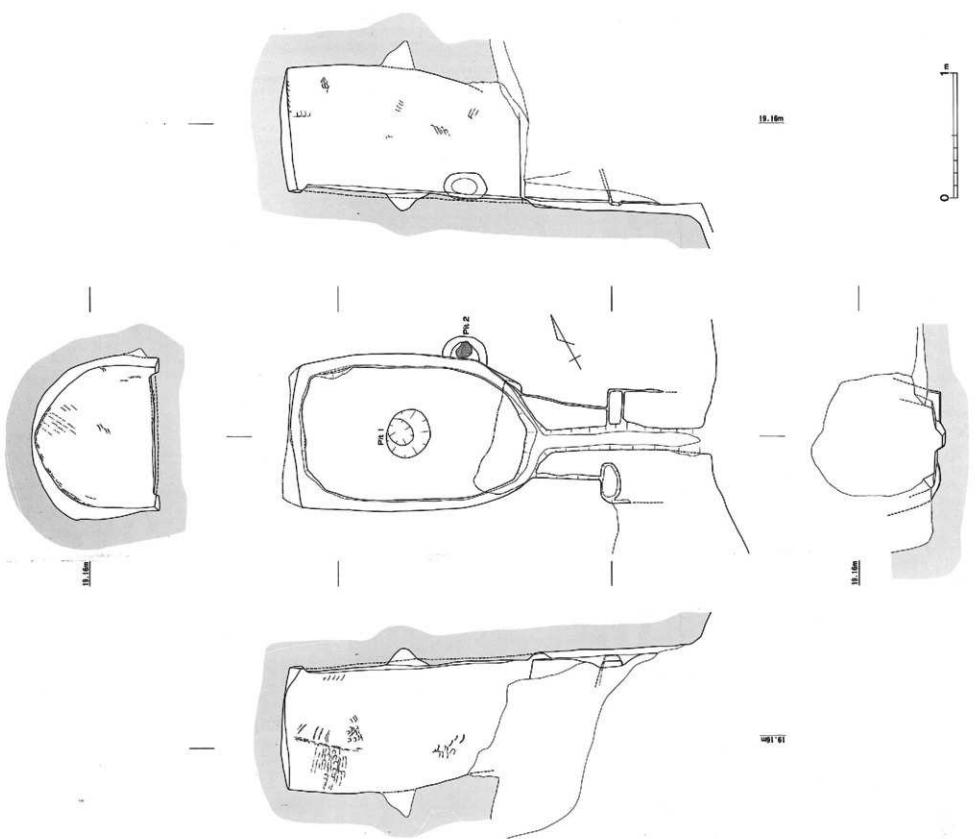


图4 第2支群1号横穴墓实测图

削りとったものでなく、先端の刃跡も残っていない。写真2は、頂部の加工であるが、円刃で奥壁に向かって削っている。

図7は、側壁部分のものであるが、やはり幅5cm以上の円刃の加工痕である。側壁部は、奥壁から前壁方向に斜め下に向かって加工されている。

遺物出土状況（図3）

遺物は、玄室内からの出土のみで、その他では出土していない。

玄室からは、蓋壺3組、疋1、直口壺2が出土しており、遺物の配置は3つに分けることができる。1つは奥壁沿いの一群〔3・4・6・7〕、1つは中央左側の一群〔1・2・9・8〕、そして右側袖部分の蓋〔5〕である。蓋〔5〕は奥から出土している身〔6〕とセットになる。

最も奥にある蓋〔1〕は、すぐ横から頭蓋骨が出土していることから、枕に転用されたものと思われる。

直口壺〔8〕は15cm以上浮いて出土しているが、その他は床面からの出土である。

また、玄室中央部から勾玉が出土している。

人骨は、1体分しか出土していないが、二次的移動があることや、遺物の配置が別れることから、追葬が行われた可能性も考えられる。

出土遺物

須恵器（図8）

〔1〕～〔6〕は蓋壺である。〔1〕は、口縁端部にゆるい段を持つ。天井は、周辺のみ雑な範削りをしており、中心部には指頭圧痕が残っている。天井部と体部との境には、二条の沈線をめぐらし、突帯を作り出している。〔2〕は、焼成時に変形しているが、底部の範削りは比較的丁寧である。〔3〕は、口縁端部に先端から4mm上に沈線を施している。天井部は範削りされているが、中心部に範切り痕を残す。天井部と体部の境の突出はシャープである。〔4〕の底部は、範削りは周辺のみで単位が不明瞭で雑である。中心部には、板目の圧痕がある。〔5〕は、口縁端部には〔3〕と同様沈線が施されている。天井部は範削り、天井と体部との境は二条の沈線によって突帯を作り出している。〔6〕は、底部範削りで中心部には範切り痕が残っている。

〔7〕・〔8〕は、直口壺である。〔7〕は胴部下半部は範削り、最大径にカキ目を施す。〔8〕は胴部の1/3を範削りする。尚者とも端部は薄く伸びる。〔9〕は、疋で口縁部の一部を欠いている。頭部には、波状紋その下に沈線が施されている。体部には、二条の沈線が施され、上段のものはタッチが弱い。沈線の間に刺突紋が施されている。胴部下半は範削りで、底は平底である。

玉類（図9）

〔10〕は勾玉で、長さ3.6cm、幅2cmを測り、石材は碧玉である。各面の研磨方向は横方向で、穿孔は片面から行っている。〔11〕は、水晶製の丸玉である。径1.1mm、孔径は、1～3mmで穿孔は片面から行っている。〔12〕は、ガラス小玉で径3mmを測る。透明感のあるライトブルーを呈し、気泡を多く含んでいる。

（2）2号横穴墓

土層堆積状況（図12）

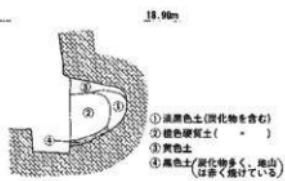


図5 第2支群1号横穴墓
pit 2 土層図

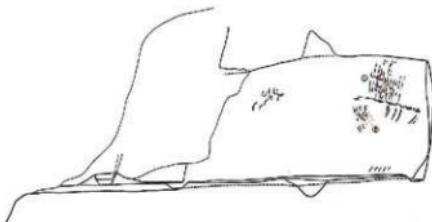


図6 第2支群1号横穴窯加工痕①(拓影) S=1/2

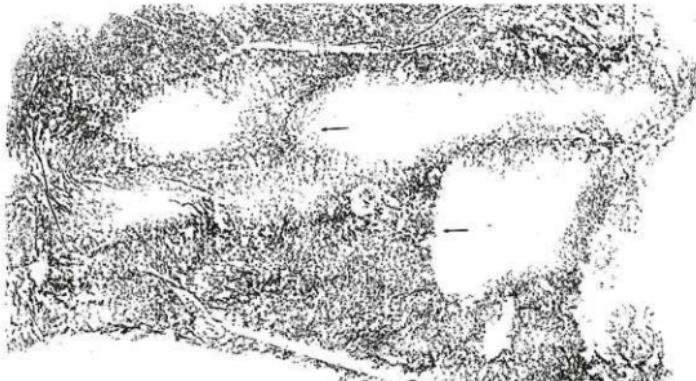


図7 第2支群1号横穴窯加工痕②(拓影) S=1/2



写真1 第2支群1号横穴墓加工痕③(左側壁)



写真2 第2支群1号横穴墓加工痕④(天井頂部)

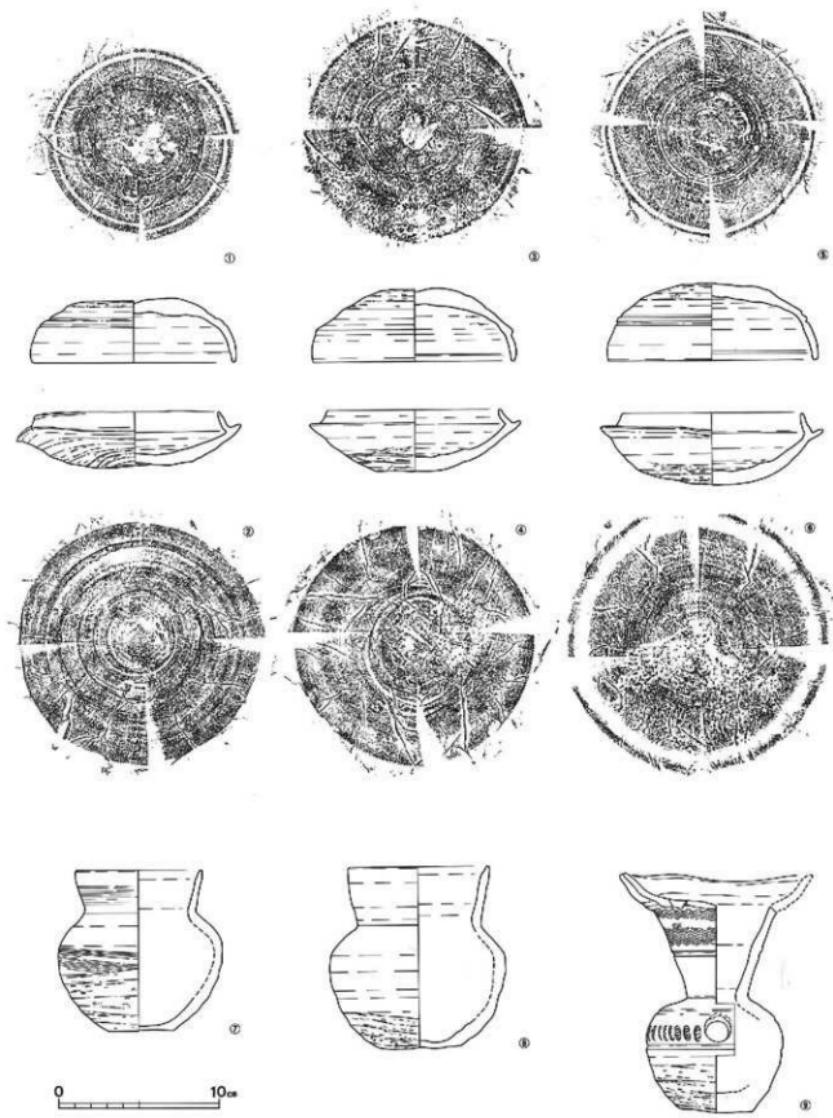


图8 第2支群1号横穴墓出土遗物(1)

墓道の埋土堆積状況は、整然としており特に擾乱された様子もない。また玄門には若干浮いた状態で人頭大の石がいくつか検出されており、これらは閉塞板を押させていたものが閉塞板が腐蝕し、墓道の埋め戻し土と共に流れ込んだものと思われる。

玄室（図13）

玄室は、長さ1.76m、奥壁での幅0.98m、高さ0.7mを測り、縦長方形プランを呈し、天井形態はアーチ型を呈する。開口方向は、S~54°~Eである。床面には各壁に沿って幅5~12cm、深さ4cmの排水溝が廻っており、玄門中央で合流し羨門まで伸びる。また、玄室側にも20cmほど伸びている。

玄室右半分には須恵器の甕を破碎して須恵器床をしているが、これに連続して、奥壁には、中央に縦に溝状の加工が施されている。この加工の床から12cmの部分については若干右側にずれている。また、右側上部には、幅34cm、奥行12cmの棚状の段が設けられている。これらの部分は、木棺の板材をはめ込むための加工と考えられる。また右袖部分にもPit 1の上に崩れた部分がある。この部分にも小口の板をはめたとも考えられる。しかしながら、この崩れには、明確な加工痕がこっていないことから自然に崩れたものか、また、Pit 1を掘るときに削られた可能性も考えられる。

なお、奥壁の溝に長側板が側壁に平行してはめ込まれたと想定すると、現状では遺物のいくつかははみ出すことになる。2号穴にも1号穴同様に、玄室内にPitがある。Pit 1は右袖部分の床面にあり、径32cm・深さ20cmを測る。掘削後埋め土をし2層（橙色土）ないし3層（橙色ブロック）上面で、火を使用したものとおもわれる。3層は硬くブロック状になっており、その上には炭化物が溜まっている。このPitも埋葬時には埋め戻されており、この上から須恵器が出土している。

Pit 2は左側壁部分に床から約20cm上にトンネル状に掘られている。口の部分は径30~35cmの楕円形で奥行55cmである。2・3・4層は硬くしまっており、3・4層は橙色で炭化物を多く含んでいることから、ここでも火の使用が考えられる。

墓道・羨門・羨道（図13）

墓道は幅80cmを測り、断面はU形を呈する。現存長は85cmであるが、まだ長かったものと思われる。

羨門は、幅60cm、高さ73cmを測り、隅丸長方形を呈する。また、左右には閉塞板を受ける削り込みが幅6cm、深さ9cmで施されており、床には幅7cm、深さ4cmの溝が施されている。

加工痕（図14・15、写真3~5）

この横穴墓は、造墓過程を荒振り→成形→調整の3段階に分けるとすると成形段階で作業が終わっているといえる。写真3は羨道左側壁の様子だが、水平に伸びる溝状の加工と、やはり水平方向に動いた凹刃

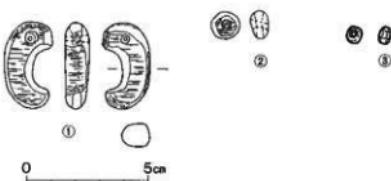


図9 第2支群1号横穴墓出土遺物(2)

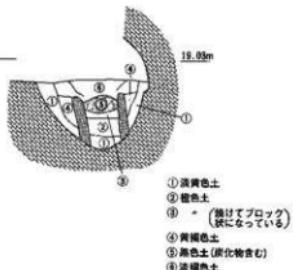


図10 第2支群2号横穴墓pit1土層図

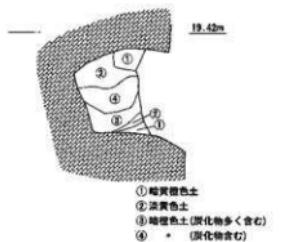


図11 第2支群2号横穴墓pit2土層図

の加工痕が見られる。また、写真5は、玄室天井から側壁にかけての状況だが、段状ないし溝状の加工が奥壁に向かってみられ、その間には、やはり円刃の加工痕が同じ方向に向かって残っている。これらの状況から工程を復元すると、まず水平方向に溝を等間隔に施し、溝と溝の間の凸状になった部分を円刃で削りしていく方法が推定される。写真4は、Pit 2の奥壁側の加工痕で図15と同じ工具と思われるが、前述のものが側壁と工具との角度が鋭角で壁に平行に工具が動くのに対して、壁と工具の角度がやや鈍角で深く削ろうとしている。

図14は、奥壁のものであるが、上半分は、やはり円刃の加工痕である。側壁との界線に向かって工具が動いている。下半分は垂直に工具が動いており、これも円刃の加工痕である。

遺物出土状況（図12）

2号機穴墓でも遺物は全て玄室内からのみの出土である。玄室内では右半分からのみ出土している。玄室右半分には、壺1個体を破碎し、幅60cm、長さ90cmの範囲で床面にしきならべ須恵器床をしている。壺片は全部で66片あり、復元の結果ほぼ1個体に復

元できた。また、須恵器床の玄門側の左隅には、壺蓋〔1〕が置かれており、隣には壺の口縁部が配置されている。また、須恵器床の一端と離れて奥壁近くにも同様の口縁部が置かれている。これらは意識的に配置されたものと思われる。

また、右袖部分には2組の壺蓋が重なりあって出土している。〔5〕・〔6〕は床面出土で、元は組み合して側壁に立てかけていたように思われる。〔3〕・〔4〕は、かなり浮いておりまた前述の玄室に流れ込んだ可能性も考えられる。また、〔1〕とセットとなる〔2〕も浮いて出土している。

出土遺物

須恵器（図16・17）

〔1〕～〔6〕は蓋壺である。〔1〕は、天井部は範切り後ナデ調整するのみで削りは施されていない。〔2〕も底部範切り後ナデ調整するのみで、口縁の立ち上がりも短い。〔3〕は、天井部は範削りを施し、体部との境には1条の沈線を施し突帯を作っている。しかし、この沈線は非常に浅く簡略化されている。また、天井部中央には範切り痕が残っている。口縁端部には、先端から5mm上に沈線を施し、その上をナデしている。〔4〕は、底部範削り、口縁の立ち上がりもしっかりしている。〔5〕は、天井部の範削りは丁寧である。体部との境には一条の沈線とナデによって突帯を作っている。口縁端部は肥厚している。〔6〕は、底部範削り、口縁の立ち上がりは短い。内面には赤色顔料が塗られている。

〔7〕は、須恵器床として使用された壺である。焼成が悪く、断面は白色で表面のみ黒灰色を呈し須恵器というよ瓦質土器といった感じである。外面頭部以下のタキは、平行タキ目紋で、一つの溝の幅が4mmと粗い。また、頸部から胴上半分には断続的にカキ目が施されている。また、この須恵器は、胎土分析よ

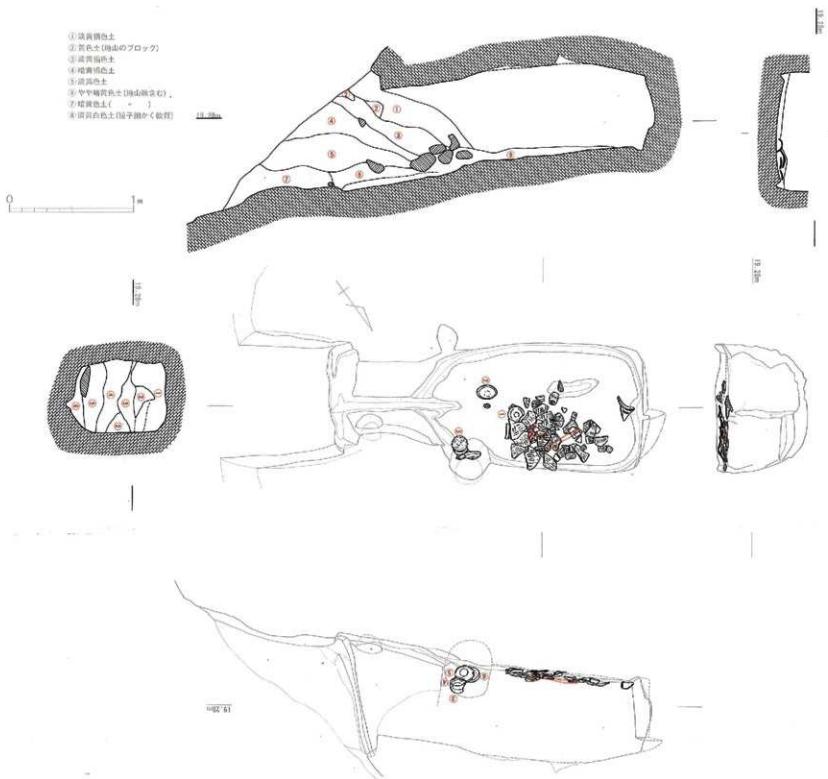


図12 第2支群2号横穴墓土層図・遺物出土状況

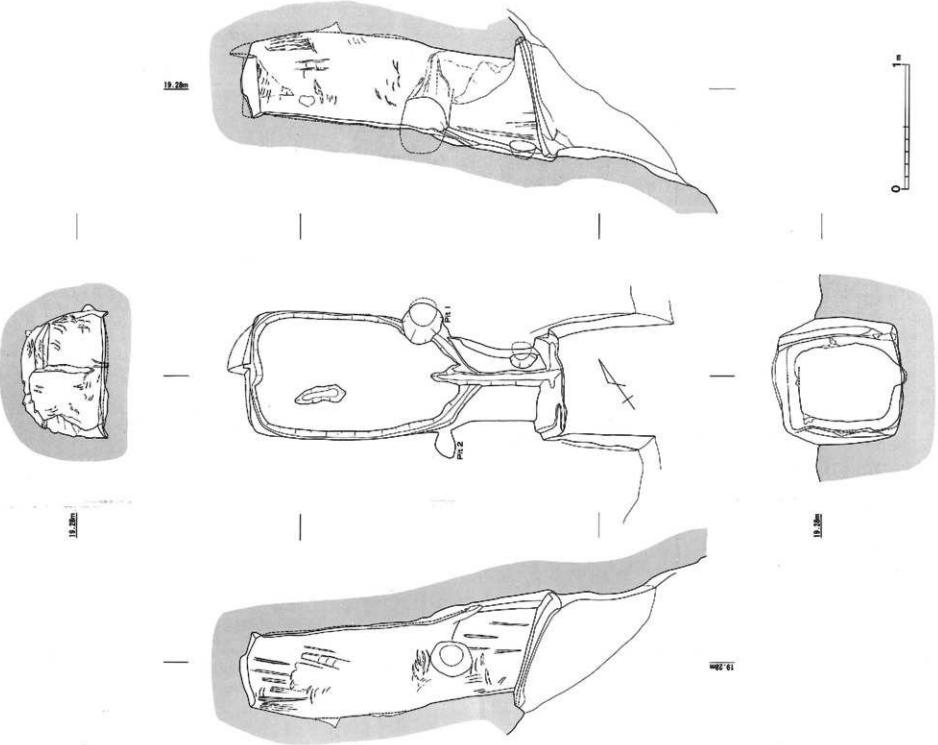


图13 第2支群2号横穴墓实测图



写真3 第2支群2号横穴墓加工痕①

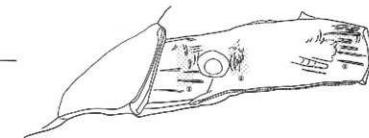


図14 第2支群2号横穴墓加工痕④(拓影) S=1/2

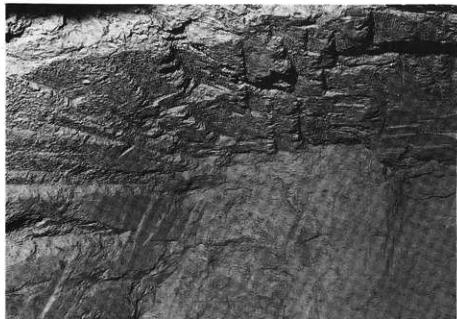


写真5 第2支群2号横穴墓加工痕③



写真4 第2支群2号横穴墓加工痕②

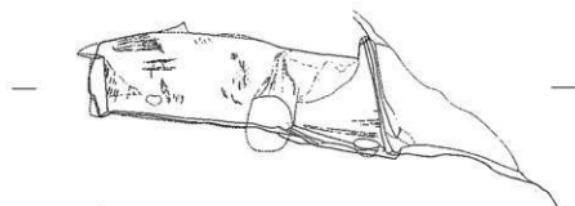


图15 第2支群2号横穴墓加工痕 S=1/2

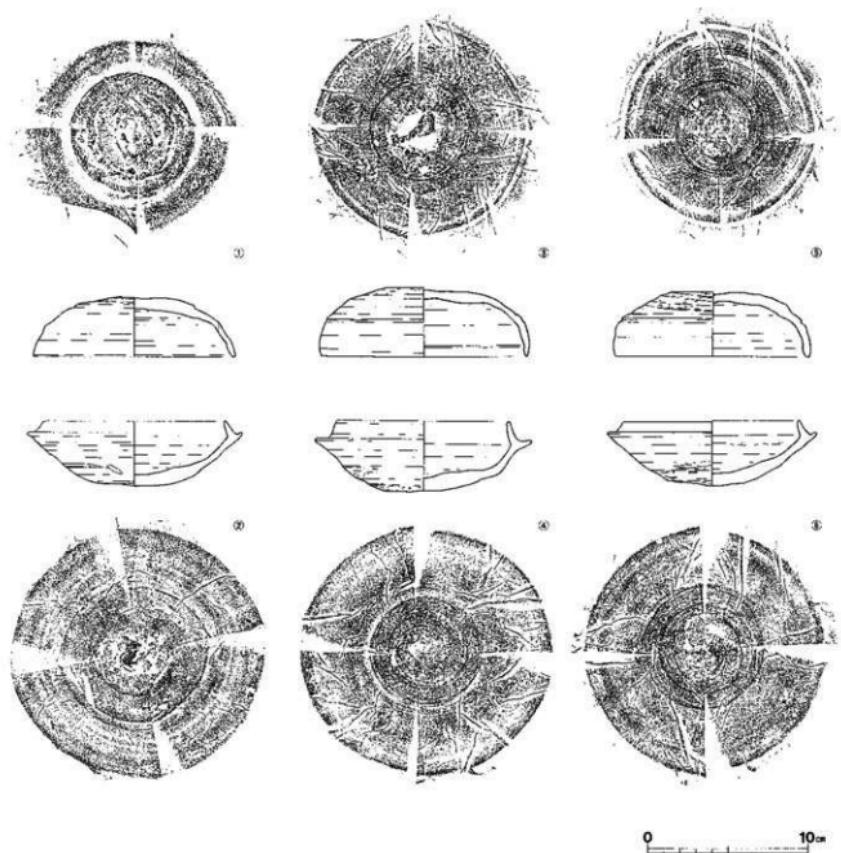


図16 第2支群2号横穴墓出土遺物(1)

り大阪陶邑産と推定される。

耳環・玉類 (図18)

[8]は耳環であるが、残りが悪く表面は剥がれている。[9]は赤瑪瑙製の勾玉である。長さ2.7cm・幅1.5cmを測る。孔径は3~1.5mmを測り、穿孔は片面からのみ行っている。[10]は、水晶製の切小玉である。長さ1.9cmを測り、穿孔は片面からのみである。[11]は、水晶製の丸玉である。径1.3mmで、穿孔は片面からのみである。[12]~[17]は、ガラス小玉である。[12]・[13]は緑色を呈し、径は7~8mmを測る。[14]~[17]は、透明感のあるライトブルーを呈するが、[17]はやや緑がかっている。径は、[14]が6mm、[15]が3mm、[16]が4mm、[17]が4mmを測る。

(3) 3号横穴墓 (図19)

遺構・埋土堆積状況

この横穴墓は、築造途中で終っている未完成横穴墓と思われるもので、埋土は横穴を完全に埋めている。現状では、長さ1.4m、幅0.7mの長方形プランで、高さ0.7mを測り天井は平天井形を呈する。奥壁・天井は、荒削りの段階を示しており、特に奥壁は顕著である。しかしながら、奥壁は、荒削りによって地山が剥がれた面が残っているため、加工痕は確認することができなかった。側壁は、ほぼ垂直に立ち上がっており、表面も丁寧に仕上げていることから、最終段階まで加工しているようである。

この横穴墓の幅・高さは、他の2穴の墓道に近いこと、また、左側壁の奥から50cmぐらいのところから幅を広げようとしていることから、墓道部をほぼ完成させたところで中断された可能性も考えられる。墓門については、閉塞石を受ける切り込み等はこの段階では設けられていない。また、入口部分の幅が広がっているがこれは墓道あるいは前庭部が造られていたものと思われるが、現在は残っていない。

この横穴墓は、遺物は全く出土しておらず、埋葬が行われた様子はない。

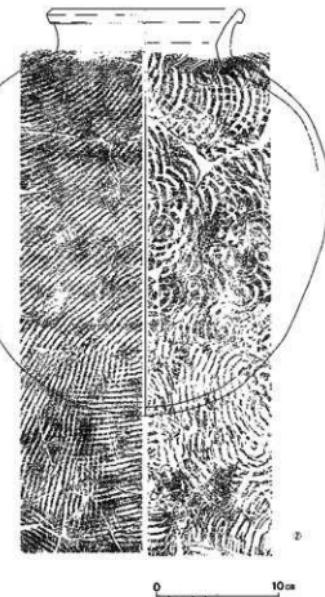


図17 第2支群2号横穴墓出土遺物(2)

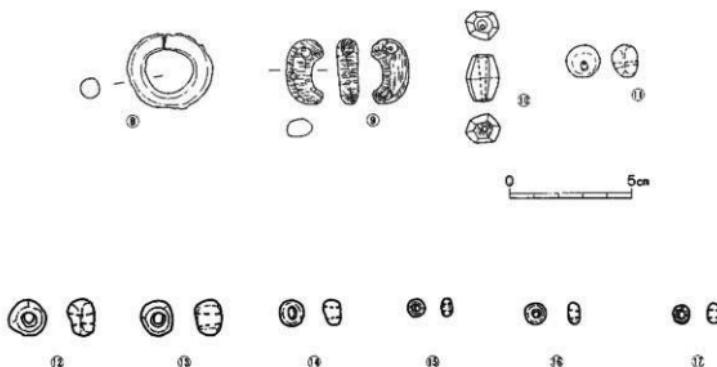


図18 第2支群2号横穴墓出土遺物(3)

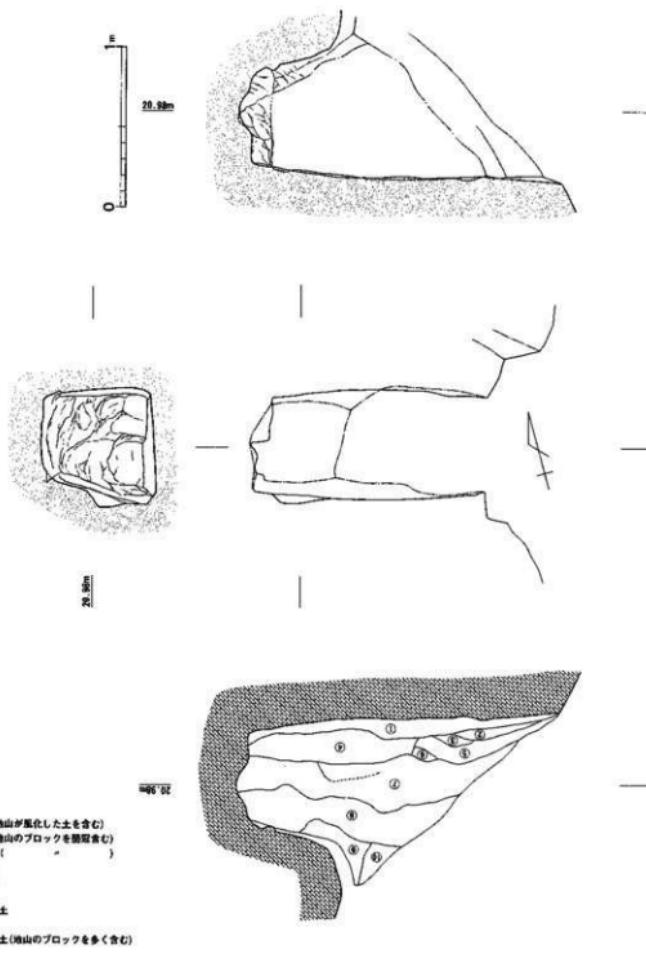


図19 第2支群3号横穴墓実測図

2、地蔵堂横穴墓第1支群（図20）

第1支群は、これまでに10基の横穴墓が確認されているが、現在は5基の横穴墓が開口しており、池田満雄の報告と対比できるのは、4号横穴墓のみである。ここでは、西から1号穴とした。3号・5号・8号は、現在開口していない。

今回、可能なものについては実測を行い、遺物については全て図面を掲載した。しかしながら、遺物についてはどの横穴墓から出土したかは不明である。

（1）4号横穴墓（図21）

この横穴墓は、現在西から4番目に位置している。開口方向は、S~25°~Wである。

玄室は、幅が奥壁で1.5m、前壁で1.4m、長さ2mを測る縱長長方形プランを呈する。奥壁は、高さで0.83mで垂直に立ち上がり、家形というより膨らんだ三角形といったほうがよいであろう。右側壁には、天井の界線として、段が削りだされている。これは軒を意識したものと思われる。この段は、右側壁以外には無い。

玄室内には、2個の石床が置かれている。東側の石床は、2個の石材からなっており、両者とも縁が全周している。

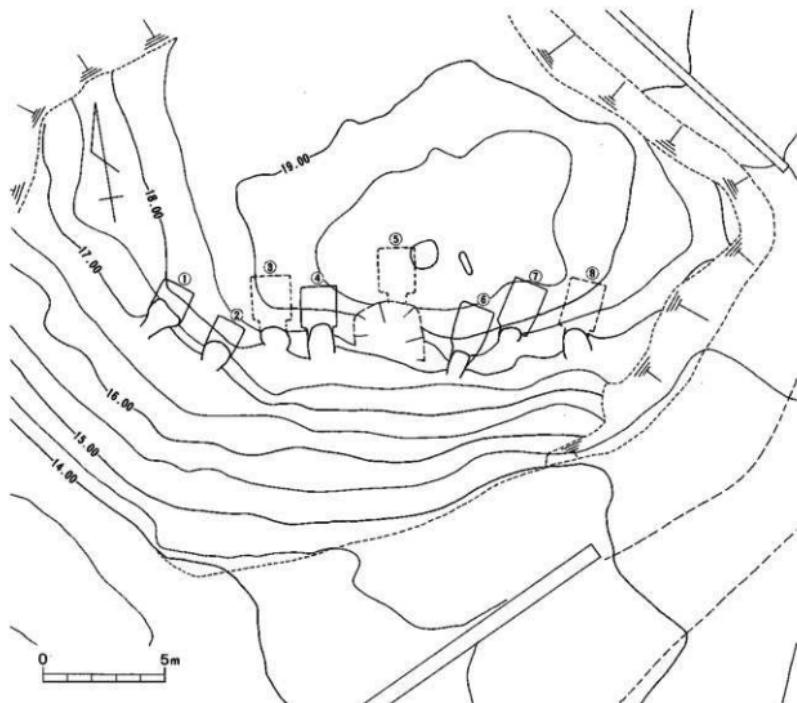


図20 地蔵堂横穴墓群第1支群配置図

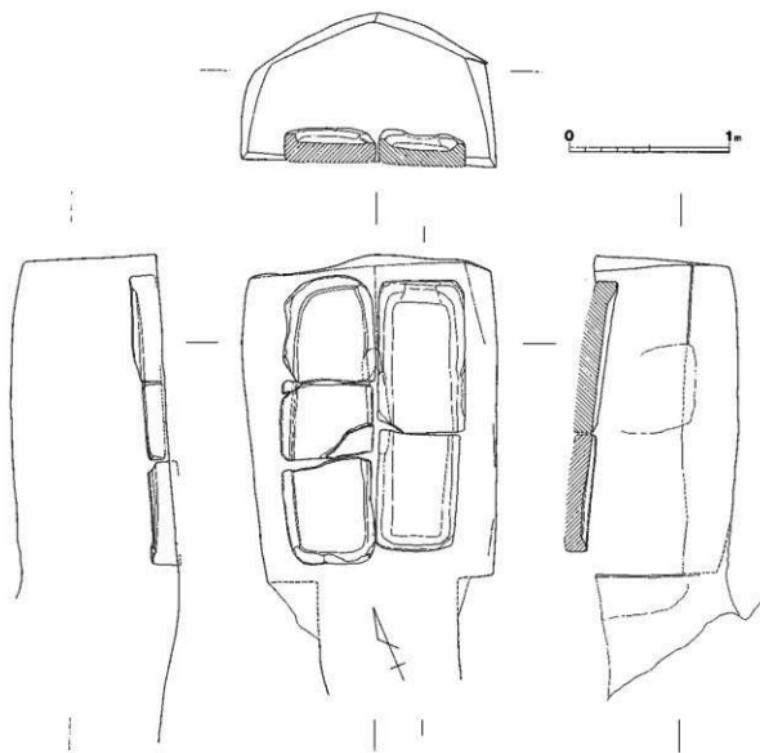


図21 第1支群4号横穴墓実測図

奥のものは、幅58cm、長さ94cmを測る。縁は上端で3~8cm、下端で10~15cm、深さ5cmを測る。

前のものは、幅50cm、長さ75cmを測り、奥のものと比べるとやや小さい。このため東側の縁が3cmほどズレを生じている。また、縁の下端で幅を測ると、奥側で34cm、前側で30cmと徐々に幅が狭くなっていることがわかる。これに対し、奥の石の下端の幅は35cmで均等である。このことは、頭位の方向を意識して制作されたためとおもわれ、前側のものを奥側のものより意識的に幅を狭くしようとしたと考えられる。両方を並べた長さは、外包で1.69m、縁の内側で1.45mを測る。

誤差は、幅0.82mと推定されるが、流入土や崩落により、その他のことについては不明である。

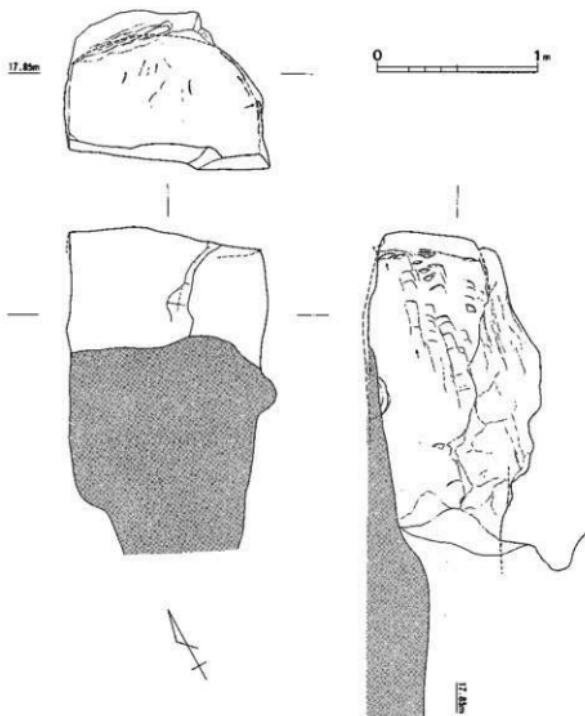


図22 第1支群6号横穴墓実測図

(2) 6号横穴墓 (図22)

この横穴墓は、玄室中央より前は流入土によって不明だが、平面プランは、幅1.2m・長さ1.7mの長方形を呈する。天井も大部分が崩壊しているが、アーチ型を呈していたようである。開口方向は、S-26°-Wである。床面は、左側2/3が7cmほど高くなっている。側壁には、奥壁方向に幅5cm~10cmの円刃の加工痕が5cm~10cmのピッチで残っている。奥壁は、高さ68cmではほぼ垂直に立ち上がり、やや膨らんだ三角形を呈する。

左側壁には、幅10cm前後の円刃の加工痕が奥に向かって5~10cmピッチで残っている。

(3) 地蔵堂横穴墓第1支群出土遺物（第28図～第32図）

この横穴墓から出土した遺物は、一度地元で丘陵頂部に埋め戻されたものを、池田満雄が採集したものである。現在は、出雲市教育委員会（図23）と八雲立つ風土記の丘（図24～27）で保管されている。

須恵器

図23(1)は口縁先端より、3mm上に幅3mmの沈線を施している。(2)は、口縁端部は薄くそのまま延びる。天井部の施削りは雜である。(3)は、底部は非常に雜な施削りで単位も明瞭でない。(4)は、1/6ほどの破片である。(7)は受部ではなく、かえりが付く蓋とセットになるものとおもわれる。

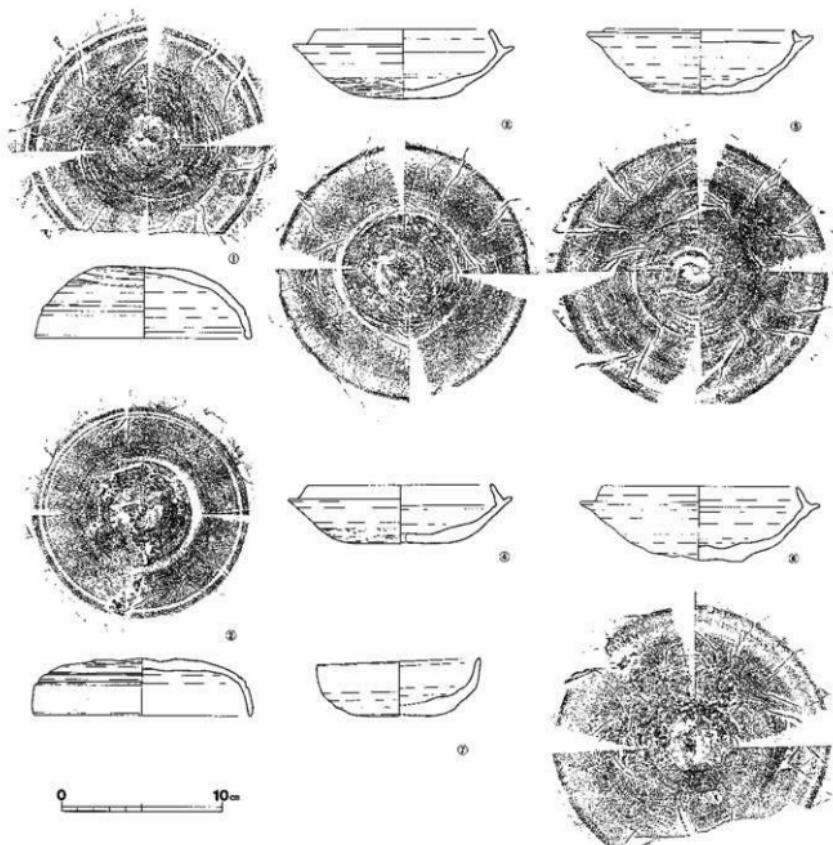
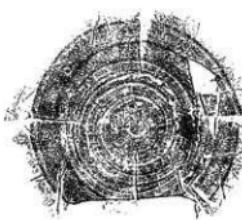
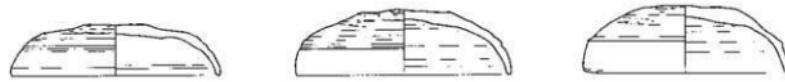
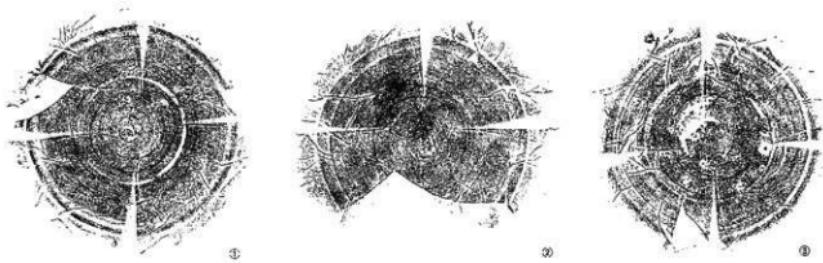


図23 第1支群出土遺物(1)



0 10cm



图24 第1支群出土遗物(2)

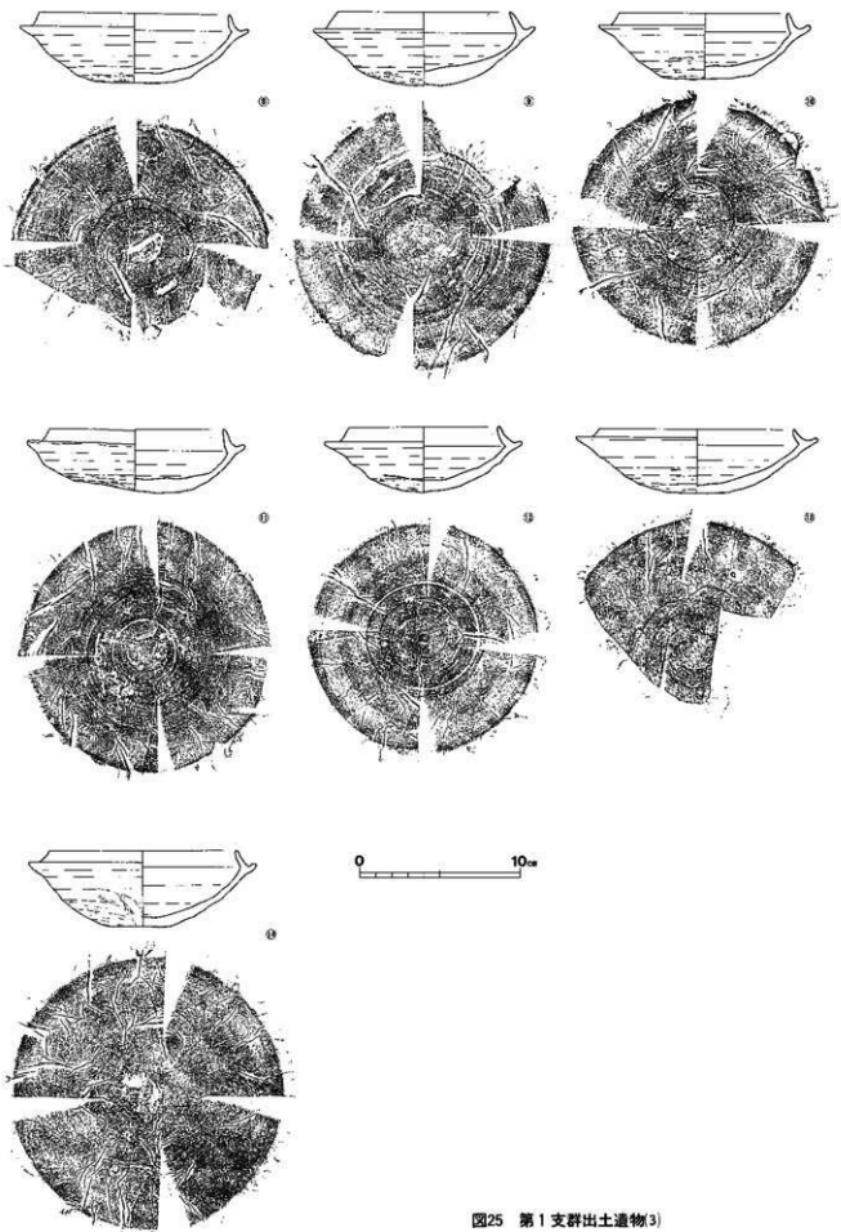


図25 第1支群出土遺物(3)

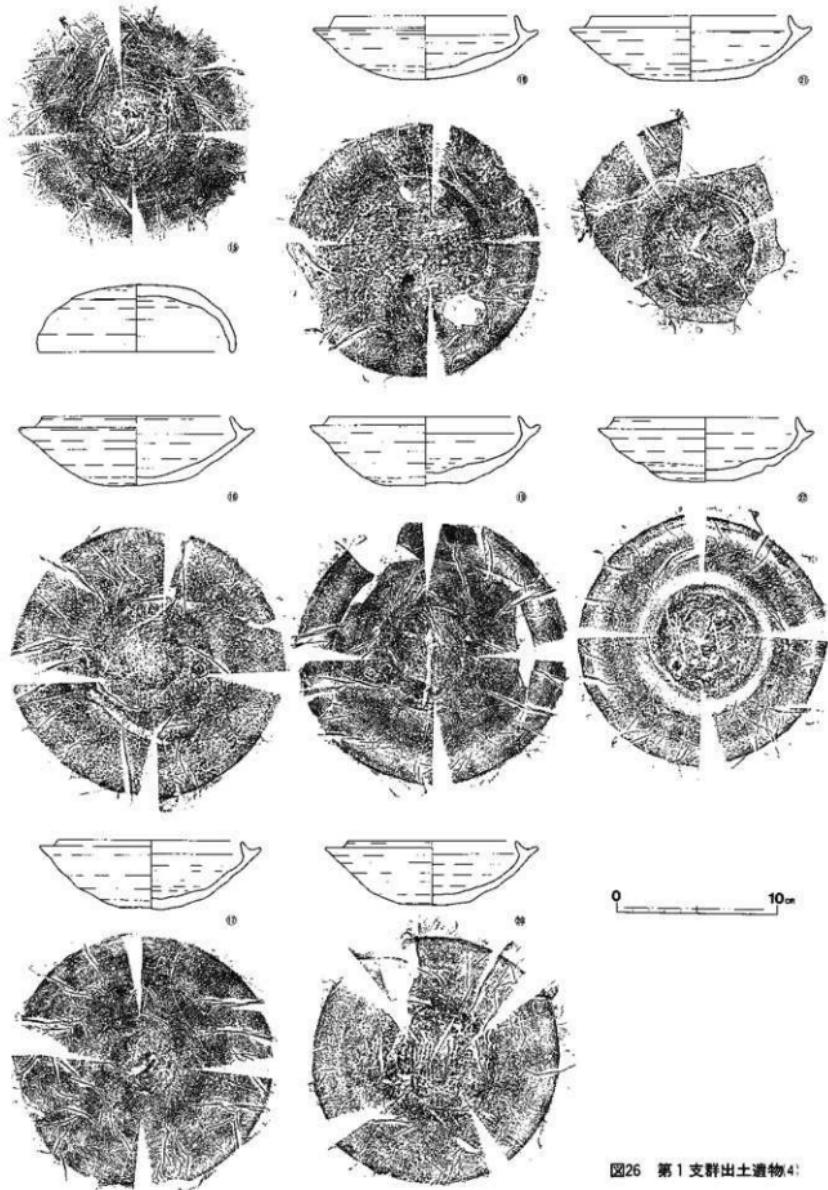


图26 第1支群出土遗物(4)

図24の(1)～(7)は、山本編年Ⅲ期の坏蓋である。口縁端部は、先端からやや離して沈線を入れるか、そのまま丸くおさめるもので、段を持つものはない。(1)～(4)は、口縁先端からやや上に沈線を施し、さらにその上をナデている。(5)～(7)の端部はそのまま伸びる。

図25の(8)～(14)は、同じくⅢ期の坏身である。いずれも範削りの及ぶ範囲は狭く、削りの単位の不明瞭なものもある。

鉄器（図27）

(19)は、直刀で現存長67cmを測る。茎は失われている。(16)は、用途不明の鉄器である。やや変形した正方形に、幅4.5cm・長さ6.5cmの長方形がくついた形をしている。



図27 第1支群出土遺物(5)

第4章 自然科学分析

(1) 出雲市地蔵堂横穴墓第2支群2号穴出土須恵器の胎土について

奈良教育大学教授 三辻 利一

分析値は下表の通りである。

(分析値)

K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
0.420	0.015	1.880	0.483	0.164	0.036

分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で表示されている。

産地を定性的に探る上にまず最初にしなければならないことは、Rb-Sr分布図を作成することである。図1にRb-Sr分布図を示す。この試料(図17)の持つ特徴はCa、Sr量が少ないとある。この点で島根県東部地域の窯の製品でないことは明白である。図28には大井領域を示してある。

もう一点考えなければならないことは、この須恵器は6世紀後半と年代が推定されていることである。この時期にはまだ、大阪陶邑の製品が各地へ伝播しているというのがこれまでのデータである。そこで、大阪陶邑群へ帰属し得るかどうかを見るため、大阪陶邑群からのマハラノビスの汎距離の二乗値をK、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算してみた。その値は3.9であり、大阪陶邑群に帰属することが判別した。したがって、この須恵器は大阪陶邑産の可能性を持つ。

もう一つの可能性は、石見地方に産地を求めてみることである。石見地方の須恵器もCa、Sr量が少ないとある。しかし、石見地方の須恵器は、大阪陶邑群の須恵器に比べて、K、Rb量がやや多い。この点を考慮に入れると、地蔵堂横穴の須恵器は、大阪陶邑産である可能性が高い。最近、大阪陶邑産と推定される古式須恵器は、米子市の新山山田遺跡周辺でも多数検出されており、今後、出雲地域の遺跡からもまとめて出土する可能性は十分ある。

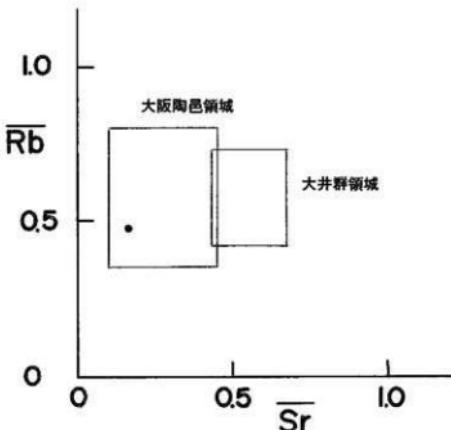


図28 出雲市地蔵堂横穴墓出土須恵器のRb-Sr分布図

(2) 地蔵堂横穴墓第2支群の出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室 井 上 晃 孝

はじめに

出雲市古志町地内の地蔵堂横穴墓第2支群1・2号穴には人骨が若干、集骨状に遺残していた。

遺残骨は、全般的に不良で、脆弱化しており、完形の骨はない。

1号穴

1. 骨の遺残性

玄室内は、小石を敷き、須恵器の土器と若干の骨が集骨状に残存していた。

骨の遺残性は不良で、完形の骨はない。

2. 遺 残 骨

1) 頭 骨

頭骨は大きく損壊、縫合部から離開、損壊していた。残存部位は顎面、前頭部、上顎部、右頭頂部、右側頭部、右後頭部と頭蓋底部（左頭頂部と左側頭部を欠く）。

歯牙

x	○	○	x	x	○	x	x	x	x	○	x	x	△	△
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7

○：釘植歯牙

△：遊離歯牙

×：死後欠（歯槽開放）

2) 上 肢 骨

右上腕骨：上、下端欠

3) 下 肢 骨

右 宽 骨：脛骨の一部

左 大腿骨：下端欠損

現場での推定最大長約310mm

3. 推 定 性 別

頭骨の諸形態と上、下肢骨が細く、きゃしゃであることから、女性と推定する。

4. 推 定 年 令

頭蓋冠縫合は未融合、口蓋縫合の切齒縫合は外側部痕跡化、内側部未融合。

歯牙はすべて永久歯、咬耗度はきわめて軽度でエナメル質がわずかに平坦化している。

上腕骨下端の骨融合は未融合、身長は130cmと小さいことから、年令は10代位が推定される。

5. 推 定 身 長

完形の四肢骨（上、下肢）がないので、身長は不詳であるが、左大腿骨が遺残、下端部欠であるが、推定最大長は約310mmであるので、参考までに計測すると、藤井法¹⁾で130.1cm、ピアソン法²⁾で127.3cmである。

6. 損傷の有無

遺残骨をみる限り、特異的損傷はない。

2号穴

1. 骨の遺残性

玄室中央部に数ヶの骨が散在していた。完形の骨はなく、遺残性はきわめて不良である。白骨化後、人為的に骨が移動されて集骨状を呈していた。

2. 遺 残 骨

- 1) 左大腿骨：骨体中央部のみ
- 2) 右 脊 骨：骨体中央部のみ（萎縮化）
- 3) 左肩甲骨：関節窩上部と烏口突起の一部
- 4) 部位不明骨片：若干

3. 推 定 性 別

遺残骨が少なく、性的特徴を有する部位もなくて、性別判定は困難である。しいて云えば、大腿骨、胫骨ともに細くきしゃであり、大腿骨後面の粗面の発達も弱いことから、女性が推定される。

4. 推 定 年 令

遺残骨が少なく、年令推定可能部位がないので、年令は不詳である。

5. 推 定 身 長

遺残骨からは、身長は不詳である。

6. 損傷の有無

遺残骨をみる限り、特異的損傷を認めない。

考 察

1. 1次埋葬かあるいは2次埋葬か

地蔵堂横穴墓第2支群1、2号穴には、人骨が集骨状に遺残していた。

1号穴には、頭部と四肢骨が遺残するが、脆弱化して損壊しており、完形の骨はない。

本屍骨は、この1号穴で1次埋葬されて、白骨化後集骨状に集められたものか、他の場所で1次埋葬され、この1号穴に再埋葬されたのかが問題となる。

遺残骨は、頭骨と右上腕骨、右寛骨、左大腿骨である。天井の落石もないことから、一般的には左右の骨が遺残するのが、通例である。

しかしに、1号穴では左右の骨が遺残していないことから、故意に遺残骨の一部が、他の場所から、この横穴に、2次埋葬されたものと推察するのが、妥当と思われる。

2号穴も同様に、2次埋葬の可能性が高い。

2. 1号穴被葬者の年令推定

被葬者は女性、推定身長は約130cmである。

頭蓋冠3縫合はすべて未融合、四肢骨の上、下端の骨融合は未融合で、10代の所見である。口蓋縫合のうち、切歯縫合は外側部が痕跡化、内側部は未融合であり、通例では20代後半の所見である。

諸骨の成長は、一般的には、加令に平行して進行するのであるが、時として例外的に一部の骨の成長が乱れることがあり³¹、切歯縫合を例外的にみてもよいのではないかと思量する。

ま と め

地蔵堂横穴墓第2支群1、2号穴には、それぞれ被葬者が1体ずつ集骨状に遺残していた。骨の遺残性は不良であった。

1号穴の被葬者は女性、推定年令は10代、推定身長は約130cm位である。

2号穴の被葬者は女性、推定年令と推定身長はともに不詳である。

1号穴と2号穴の被葬者は、二次埋葬の可能性が高い。

文 献

- 1) 藤井 明 (1960) : 四肢長骨の長さと身長との関係に就て、順天堂大学体育紀要 3、49-61。
- 2) Pearson, K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution, V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. Ser. A, 192, 169-244.
- 3) 井上晃孝、井上 仁、入澤淑人 (1993) : 年令推定が困難であった腐乱死体の剖検例、法医学の実際と研究 36、147-152。

写真の説明

1~5: 1号穴女性の頭蓋骨

1: 正 面

2: 頭蓋底面

3: 頭 頂 面

4: 左側頭面

5: 右側頭面

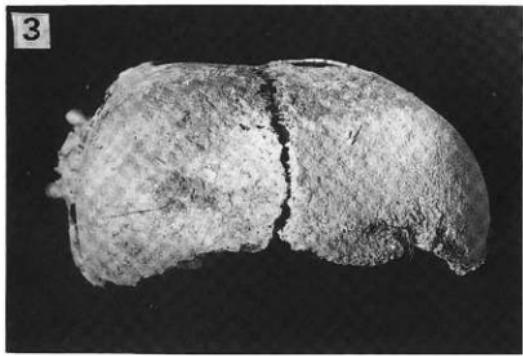
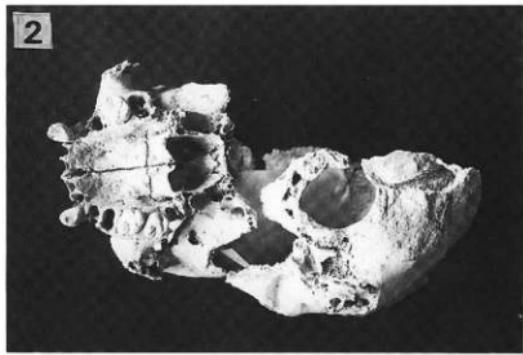


写真6 第2支群1号横穴墓出土人骨(1)

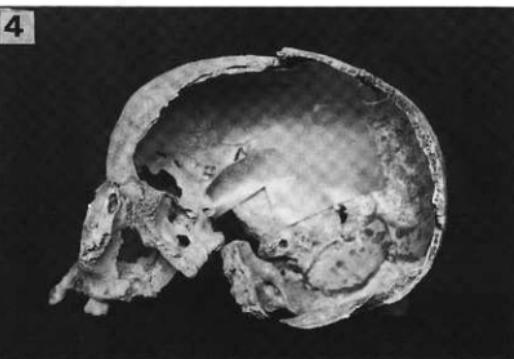


写真7 第2支群1号横穴墓出土人骨(2)

第5章 関連遺跡

1. 井上横穴墓群〔古志町井上〕(表1)

この横穴墓群は、放レ山古墳より谷を挟んで東側の丘陵に位置している。池田満雄・門脇俊彦により調査が実施されており、その後、池田満雄により報告されている。まとめるところのようになる。石床・家形石棺を内蔵しているものや、玄室の形態が家形のものが多く、復室構造のものも有り注意される横穴墓群といえる。この内A支群1号穴と2号穴については、出土遺物の一部が神戸川小学校で保管されていることから、これについては調査を行った。また、同小学校で保管されており、出土地不明の須恵器についても横穴墓出土の可能性が考えられるものがあることから、あわせて図面を掲載した。

支群名	横穴名	出土品	備考
A 支群	1号横穴	壺身3、壺蓋1、直刀1	人骨1体
	2号横穴	壺、高壺、提瓶、台付壺、壺蓋2	石床、人骨3体
	3号横穴	須恵器、土師器	
B 支群	1号横穴	壺壺	石床
	2号横穴	壺壺	石床
C 支群	1号横穴		石床、丸天井
	2号横穴		石床、丸天井
	3号横穴		石床、整正家形妻入・復室
	4号横穴	壺壺、高壺、壺、金環1	石床、丸天井
	5号横穴		組合式家形石棺2、丸天井
	6号横穴		石床、丸天井
D 支群	1号横穴		
	2号横穴		家形妻入形式
	3号横穴		家形妻入形式
	4号横穴		家形妻入形式
	5号横穴		
	6号横穴		
	7号横穴		
E 支群	1号横穴		家形妻入
	2号横穴		家形妻入
F 支群	1号横穴		
	2号横穴		アーチ形
	3号横穴		
	4号横穴		

注) 表1の各支群の名称は『増補改訂鳥取県遺跡地図I(出雲・薩岐編)』(鳥取県教育委員会 1993年)によるものである。
E支群は池田満雄がD横穴群としたもので、D・F支群は、門脇俊彦、西尾克己らによって新たに発見され追加されたものである。

表1 井上横穴墓群一覧表

2. 神戸川小学校所蔵遺物

(1) A支群1号横穴墓出土遺物(図29)

(1)・(2)の壺壺は、セット関係をなす。壺(1)は、天井部の鋸削りは丁寧で、口縁端部は、段状になっている。身(2)も底部の鋸削りは丁寧に施されている。(3)・(4)は、ナデのみによる調整で、(4)は、鋸切り未調整である。

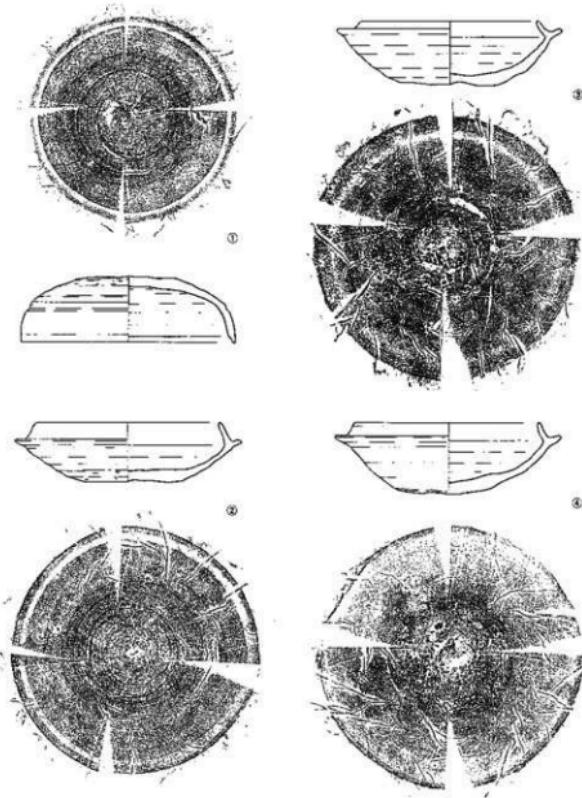


図29 井上横穴墓群A-1号横穴墓出土遺物

0 10cm

(2) A支群2号横穴墓出土遺物 (図30)

(1)・(2)の蓋坏はセット関係にある。蓋(1)は、天井部の箆削りは単位は不明瞭であるがわりと丁寧に施されている。また、口縁端部は、若干端部を肥厚させ先端からやや上に沈線を施し、さらにナデることによって軽い段状に仕上げている。(5)の高坏は、脚部に2方2段の透かしがあり、上段は切り込みで貫通しておらず下段は方形透かしである。脚中央部には沈線が施されており、下段の透かしにかかっている。(6)の翫は頭部の波状紋は雄である。(7)・(8)はセットで、(7)は丁寧に作られており、天井部は箆削り後矯で調整しているようである。つまみは円錐形である。(8)は脚付き短頭翫で、肩部には、2条の沈線の間にカキ目を施した後に、施紋している。上の沈線は非常に弱く、沈線の無い部分もある。

この横穴からは3体の人骨が出土していることから、(1)・(2)が初葬時、(3)・(4)追葬時の供獻である可能性も考えられる。

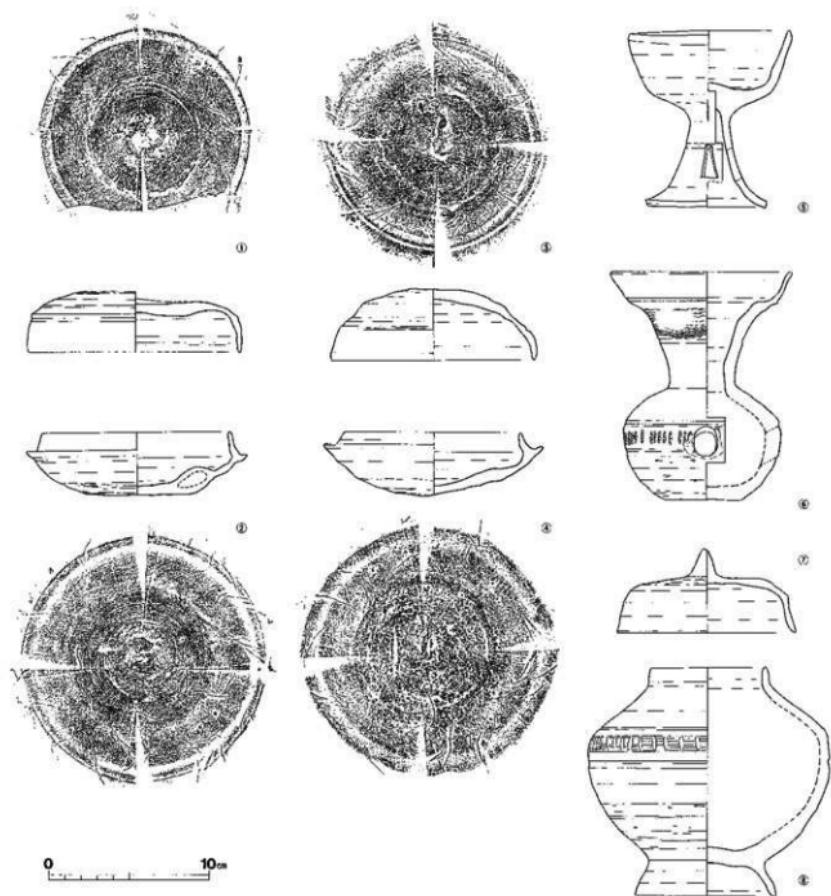


図30 井上横穴墓群A-2号横穴墓出土遺物

(3) 神戸川小学校所蔵出土地不明遺物(図31)

(1)・(2)は丁寧な作りで、蓋・身とも口縁先端部には、沈線を施し2段にしている。(3)は、底部の施削りは単位が明瞭で比較的丁寧であることから、第29図-2、第30図-2と同じ時期である可能性がある。(7)は、壊部の深い高坏である。脚には、2方に切り込み状の透かしがある。

(1)・(2)は、Ⅱ期の蓋坏であることから、横穴墓出土とは考えられないが、残りのものは横穴墓出土の可能性が考えられる。

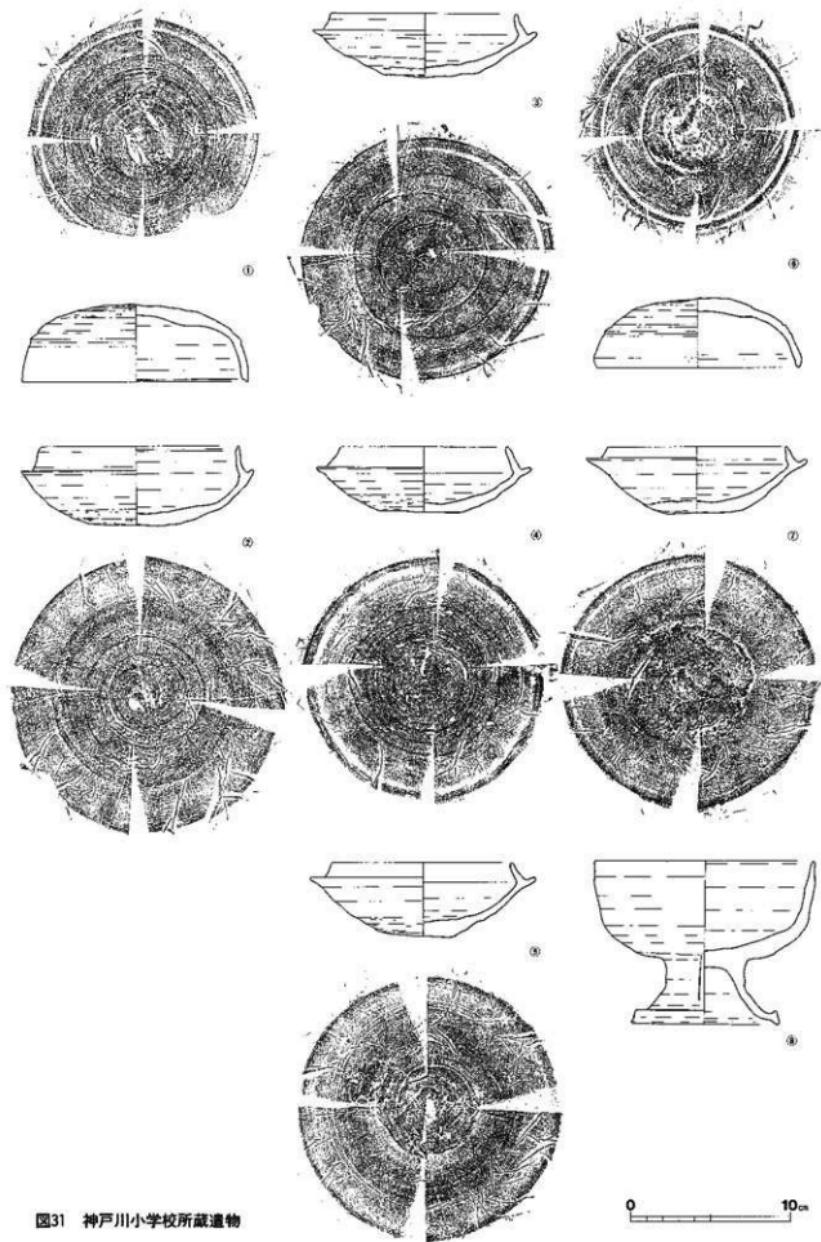


図31 神戸川小学校所蔵遺物

0 10cm

第6章 まとめ

これまで出雲平野における横穴墓については、多くの横穴墓が分布していることは知られている。しかしながら、上塩治横穴墓群などについては詳細な分布調査が行われ、部分的に図化も行われているが¹、その他の横穴については、その実態はほとんどわかっていない。また、図化されたものも、大半が盗掘を受けており時期の決め手となる遺物が出土している良好な資料が乏しかった。また、これまでに調査されている横穴墓、時期のわかつている横穴墓は、ほとんどが山本編年Ⅳ期に属するもので、導入期にあたるⅢ期の横穴墓についての確実な資料は、祝遷横穴墓²一基しか知られていないかった。しかし、近年の開発に伴い横穴墓の調査も急増し、Ⅲ期の横穴墓も発見されており、上塩治横穴墓群に匹敵する規模を有する神門横穴墓群の様子も分りつつある。また、このような状況の中、これまでの資料を再整理し、さらに現状で可能な限り図化率を高めていく、精力的な研究も進められている。

今回の地蔵堂横穴墓群の調査は、出雲西部における横穴墓の導入を考える上で貴重な資料といえる。ここでは、現在ある資料で、出雲平野における出現期の横穴墓の特徴について考えたい。

出雲平野における横穴墓の出現時期

これまで、発掘調査を経た横穴墓の中で、Ⅲ期の須恵器が出土しているのは、地蔵堂横穴墓第2支群1号穴・2号穴、上塩治横穴墓群第34支群³、小浜山横穴墓群、祝遷横穴墓である。また、横穴墓の形態等詳細は不明であるが、Ⅲ期の須恵器が出土しているものに、地蔵堂横穴墓第1支群⁴、井上横穴墓A支群1号穴・2号穴⁵、久畿園横穴墓⁶がある。これらの須恵器を見ると、ほとんどがⅢ期の後半のものであるが、井上横穴墓A支群1号穴と2号穴から出土している蓋坏（第29図1・2、第30図1・2）は、蓋の口縁端部に段を持ち、天井部の範削りも比較的丁寧に施されていることから、Ⅲ期の中でも比較的古い段階のものと考えられる。しかしながら、出土状況など詳細については不明なため、横穴墓の築造時期を示すものかどうか解らない。現状では、出雲平野における横穴墓の出現は、Ⅲ期の新しい段階と考えたい。

つまり、出雲平野における横穴墓の出現は、出雲東部と比べてやや遅れることになる。

Ⅲ期の横穴墓の特徴

Ⅲ期の横穴墓の特徴を列記すると以下のようになる。

- 平面プランは、縱長長方形で、袖部分が明確にあるものと、袖部分が明確でなく徐々に幅が狭くなりそのまま狭道に至る徳利状を呈するものがある。
- 天井形態は、アーチ形のみである。
- 床面には、溝を廻らすものがある。また、腰床、須恵器床などを設けるものがある。
- 凝灰質砂岩などの軟質な地層にのみ造墓される。（上塩治横穴墓では、凝灰岩にも横穴墓が築かれるが、全てⅣ期のもので、Ⅲ期のものは全くない。）

これらの特徴は、出雲平野のⅢ期の横穴墓のすべてに共通していえることである。

地蔵堂横穴墓群に見られる造墓技術

工具痕として明確に捉えることができたのは、円刃と溝状の加工痕である。円刃は幅10cm前後の大きさである。溝状の加工は、幅2~3cmを測る。

また、横穴墓の造墓の過程を荒掘り→成形→調整の3段階に大きく分けると、1号穴は調整段階、2号穴は成形段階にあたる。この二つの段階の概要を述べると。成形段階では、各壁に水平方向に溝を入れ、溝と溝の間の

凸部分を円刃の工具で削り落として横断面アーチ状に整える。調整段階では、成形段階と同じ円刃の工具で天井部は垂直に削り、側壁部分は水平方向に削り平滑にする。

荒掘り段階の加工痕については、今回明らかにすることはできなかったが、円刃の工具で大部分は加工されているようである。

おわりに

最後に、出雲平野の横穴墓の様相と、今後の課題についてまとめておきたい。

地蔵堂横穴墓群の調査も含め、ここ数年の調査により、出雲平野における横穴墓の特徴についても明らかになりつつある。

出雲平野には、約20の横穴墓群が各所にあり、横穴墓の数は300基近くになる。大半は、神戸川の左岸の神門横穴墓群と神戸川右岸の上塩治横穴墓群に集中している。

神戸川右岸の上塩治横穴墓群を見てみると。この横穴墓群の大半は、凝灰岩に穿たれているが、これらは全てⅣ期のものでありⅢ期の横穴墓は知られていない。また最近発見された34支群は、上塩治横穴墓群の北端に位置し、凝灰質砂岩に掘られたⅢ期の横穴墓群で、形態は何れも縱長長方形プランで横断アーチ型である。つまり、上塩治横穴墓群でもⅢ期の間は軟質な凝灰質砂岩に造墓しており、Ⅳ期になってはじめて凝灰岩にも横穴墓を築くようになる。また、上塩治横穴墓群におけるⅣ期の横穴墓の多くは整正家形を呈することから、この時期に家形の横穴墓を造る技術と凝灰岩を掘削する技術¹¹が、同時に上塩治横穴墓群に導入されたものと考えられる。これは、両方の技術を兼ね備えた工人が横穴墓の造墓に関係したためと思われる。

神門川左岸には、神門横穴墓群の他にも地蔵堂横穴墓群、井上横穴墓群や神西湖周辺にもいくつかの横穴墓群が存在している。この地域の平野内にある丘陵の岩質は、凝灰質砂岩であり、そこにⅢ期・Ⅳ期とも造墓されている。

Ⅲ期の横穴墓は、縱長長方形プランで横断アーチ形で、Ⅳ期になると家形の横穴墓を造りはじめるが、その形態は横断アーチ形の横穴墓の天井と側壁の境に軒を作り出しただけの簡略化されたものが大半を占める。

このように、Ⅲ期については形態・造墓される岩質が共通しているが、Ⅳ期になると上塩治横穴墓群と神戸川左岸の横穴墓とでは、形態や造墓技術に差が見られるようになる。これは、横穴墓を造墓した工人の差によるものと思われる。

しかしながら、このような工人集団の把握には、横穴墓の造墓技術をはじめ石棺・石床など技術を明確にする必要があり、検討すべき多くの課題がある。その最初の作業として横穴墓に残された加工痕を正確に記録していくことが今後の大きな課題といえる。

註

- 1 烏根県教育委員会他「出雲・上塩治を中心とする埋蔵文化財調査報告」1980年
- 2 西尾良一「祝賀横穴」（『出雲・上塩治を中心とする埋蔵文化財調査報告』烏根県教育委員会）1980年
- 3 西尾克己・原田敏照・守岡正司「湖陵町の横穴墓」（『湖陵町誌研究』第1号湖陵町教育委員会）1992年
- 4 出雲市教育委員会により1992年～1993年に調査
- 5 出雲市教育委員会により1993年に調査
- 6 池田満雄「下古志町地蔵堂横穴群」（『出雲市の文化財—出雲市文化財調査報告第二集—』出雲市教育委員会）1960年
- 7 池田満雄「古志町井上地区的横穴」（『出雲市の文化財—出雲市文化財調査報告第一集—』出雲市教育委員会）1956年
- 8 池田満雄「今市町鷹ノ沢消滅横穴出土土器」（『出雲市の文化財—出雲市文化財調査報告第一集—』出雲市教育委員会）1956年

- * 西尾らは、円刃の加工痕については成形段階のものでU字形彫状工具によるものとしている。また、今回の調査では確認できなかったが、荒掘りには鑿状工具を使用したとしている。（註3に同じ）
- ⑩ 凝灰岩に掘削された横穴墓には、剥突状の加工痕が観察される。この加工痕は神門横穴墓群などの凝灰岩質砂岩に掘削された横穴墓には見られない。西尾らは、ツルハシ状の工具を想定している。（註3に同じ）

土器觀察表

擇団番号	遺跡名	横穴名	器種	口径	器高	調整	備考
8 - 1	地蔵堂横穴墓 第2支群	1号穴	坏蓋	12.6cm	3.9cm	天井部範削り	端部に段あり、二条の沈線を施し肩部に突帯を表す。
- 2			坏身	11.4cm	3.4cm	底部範削り	
- 3			坏蓋	12.5cm	4.5cm	天井部範削り	端部に沈線を施す。肩部には一条の沈線を施す。
- 4			坏身	10.9cm	3.8cm	底部周辺のみ範削り	
- 5			坏蓋	13cm	4.8cm	天井部範削り	肩部に突帯を表現、口縁端部に沈線を施す。
- 6			坏身	11.3cm	4.5cm	底部範削り	
- 7			直口壺	8cm	10cm	胴部最大径にカギ目 底部範削り	
- 8			直口壺	9cm	11.4cm	底部範削り	
- 9			甌	12cm	15cm		
16 - 1		2号穴	坏身	12.6cm	3.7cm	天井部撫で調整	
- 2			坏蓋	11.4cm	4cm	底部撫で調整	
- 3			坏蓋	12.1cm	4cm	天井部範削り	端部には沈線を施しその上を撫で調整している。肩部に一条の沈線を施す
- 4			坏身	10.7cm	4.4cm	底部範削り	
- 5			坏蓋	13cm	4.4cm	天井部範削り	端部は丸く肥厚する。
- 6			坏身	10.5cm	4.1cm	底部範削り	
17 - 7			甌	16cm	33cm	胴部タタキ	焼成不良

擇団番号	遺跡名	横穴名	器種	口径	器高	調整	備考
23 - 1	地蔵堂横穴墓 第1支群	不明	坏蓋	13.5cm	4.5cm	天井部範削り	端部を肥厚させ沈線を施す。肩部に一条の沈線を施す。
- 2			坏蓋	13.5cm	3.5cm	天井部雑な範削り	肩部に二条の沈線を施す
- 3			坏身	11cm	4.5cm	底部非常に雑な範削り	
- 4			坏身	(11.5cm)	(3.7cm)	底部範削り	
- 5			坏身	11.9cm	4cm	底部撫で調整	口縁立ち上りが短小

挿図番号	遺 踪 名	横穴名	器 種	口 径	器 高	調 整	備 考
- 6			坏身	12.2cm	4.5cm	底部撫で調整	底部外面灰被りで自然軸がかかる。
- 7			坏身	10.2cm	3.5cm	底部撫で調整	
24 - 1			坏蓋	12.8cm	4.2cm	天井部箝削り	肩部に一条の沈線施す。端部に沈線施す。
- 2			坏蓋	12.8cm	4.7cm	天井部箝削り	端部に沈線施しその上を撫で調整。肩部に二条の沈線を施す。
- 3			坏蓋	12.2cm	4.1cm	天井部箝削り	端部に沈線施しその上を撫で調整。肩部に一条の沈線を施す。
- 4			坏蓋	12.9cm	3cm	天井部箝削り	肩部に一条の沈線を施す
- 5			坏蓋	13.2cm	4cm	天井部箝削り	肩部に一条の沈線を施す
- 6			坏蓋	12.7cm	4.2cm	天井部箝削り	端部はそのまま伸び、肩部に一条の沈線を施す。
- 7			坏蓋	12.3cm	4cm	天井部箝削り	端部はそのまま伸びる。
25 - 8			坏身	11.9cm	4.4cm	底部は雑な箝削りで範囲も狭い。	
- 9			坏身	10.8cm	4.6cm	底部は雑な箝削り。	焼成不良
- 10			坏身	10.5cm	4.1cm	底部箝削り	
- 11			坏身	10.8cm	4cm	底部箝削り	
- 12			坏身	12.4cm	4cm	底部箝削り	
- 13			坏身	12.1cm	4cm	底部箝削り	
- 14			坏身	11.7cm	4.7cm	底部箝削り	
26 - 15			坏蓋	12.3cm	4.2cm	天井部撫で調整	端部は丸く肥厚する。
- 16			坏身	11.9cm	4.4cm	底部撫で調整	
- 17			坏身	11.4cm	4.3cm	底部撫で調整	
- 18			坏身	11.2cm	4cm	底部撫で調整	
- 19			坏身	11.8cm	4.3cm	底部撫で調整	底部中央に板目痕?
- 20			坏身	10.5cm	4cm	底部撫で調整	底部中央に板目痕?

捲回番号	遺 踪 名	横穴名	器 種	口 径	器 高	調 整	備 考
- 21			坏身	12.3cm	4cm	底部撫で調整	底部範切り未調整?
- 22			坏身	11.4cm	4cm	底部撫で調整	
29 - 1	井上横穴墓群 A支群	1号穴	坏蓋	13.4cm	4.1cm	天井部丁寧な範削り	端部は二段になっている 肩部に一条の沈線を施す。
- 2			坏身	11.5cm	3.7cm	底部丁寧な範削り	
- 3			坏身	11cm	4cm	底部撫で調整	
- 4			坏身	11.4cm	4.5cm	底部撫で調整	
30 - 1		2号穴	坏蓋	13.3cm	3.8cm	天井部範削り	端部は二段になる。肩部 には一条の沈線を施す。
- 2			坏身	11.6cm	3.9cm	底部範削り	
- 3			坏蓋	12.7cm	4.5cm	天井部撫で調整	肩部には一条の沈線を施す。
- 4			坏身	11cm	4cm	底部撫で調整	
- 5			高坏	10.2cm	11cm	撫で調整	脚部に二段三方透かし、 上段は切り込みのみ、下段 は方形を呈する。脚中央には 一条の沈線を施す。
- 6			越	11.3cm	14.2cm	底部範削り	頸部には波状紋と一条の 沈線、体部には二条の沈 線とその間に羽状紋を施す。
- 7			蓋	11.1cm	5.2cm	天井部範削り	円錐形のつまみが付く。
- 8			短頸蓋	7.2cm	14.2cm	体部下半は範削りを 施す。	肩部に二条の沈線とその 間に刺突紋とカキ目を施す。

神戸川小学校保管遺物（出土地不明）

捲回番号	遺 踪 名	横穴名	器 種	口 径	器 高	調 整	備 考
31 - 1	不 明		坏蓋	14.2cm	4.9cm	天井部丁寧な範削り	口縁先端に沈線施し二段 にする。肩部に一条の沈 線を施す。
- 2			坏身	12.2cm	5cm	底部丁寧な範削り	口縁先端に沈線を施し二 段にする。
- 3			坏身	11.4cm	4cm	底部の範削りは単位 が明瞭である。	
- 4			坏身	10.5cm	4.1cm	底部範削り	
- 5			坏身	11.3cm	4.6cm	底部範削り	

揮団番号	遺 跡 名	横穴名	器 種	口 径	器 高	調 整	備 考
- 6			坏蓋	12.4cm	4.4cm	天井部範削り後撫で調整	肩部に二条の沈線を施す
- 7			坏身	11cm	4.1cm	撫で調整	
- 8			高坏	13.8cm	10.2cm	撫で調整	脚部に切り込み状の透かしが二方に設けられている。



1. 地藏堂横穴墓第2支群遠景

第2支群1号横穴墓



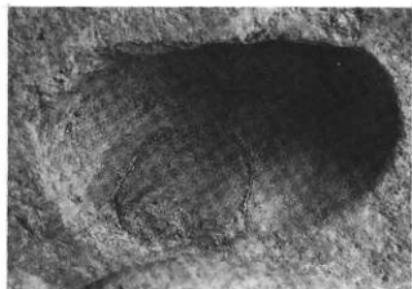
2. 第2支群1号横穴墓遺物出土状況



3. 第2支群1号横穴墓砾床



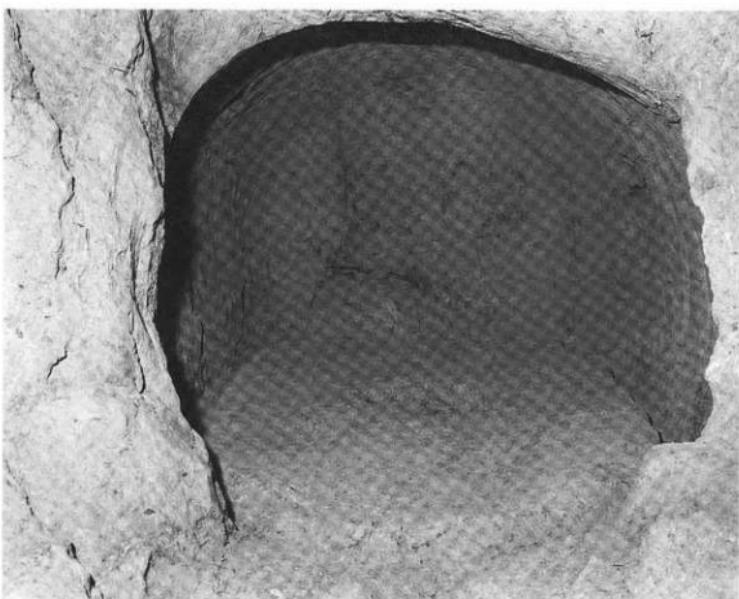
1. 第2支群1号横穴墓人骨出土状况



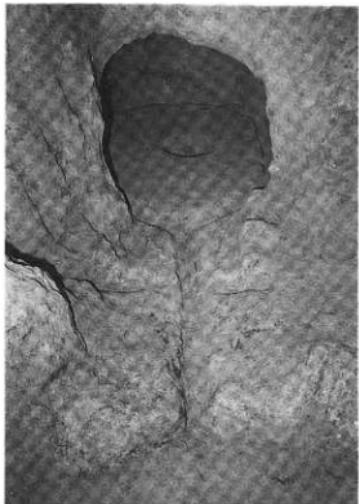
3. 第2支群1号横穴墓pit2(完掘状况)



2. 第2支群1号横穴墓pit2(挖出状况)



4. 第2支群1号横穴墓完掘状况(玄室)

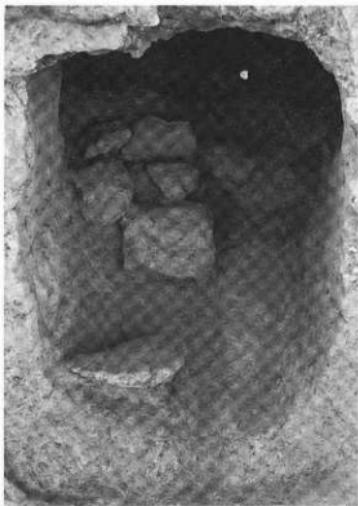


1. 第2支群1号横穴墓完掘状况(墓道)

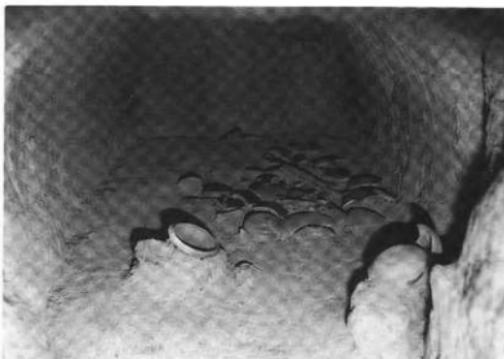
第2支群2号横穴墓



2. 第2支群2号横穴墓挖出状况



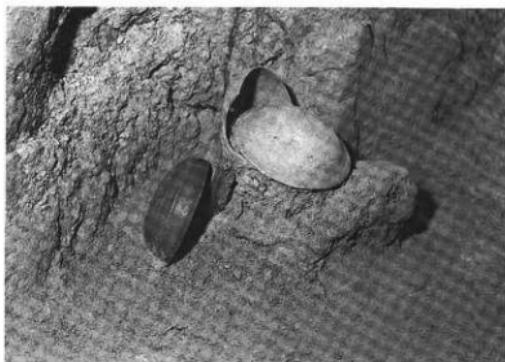
3. 第2支群2号横穴墓墓道部出土状况



1. 第2支群2号横穴墓
須惠器床檢出狀況



2. 第2支群2号横穴墓
遺物出土狀況



3. 第2支群2号横穴墓
遺物出土狀況(右袖)